

常設展示解説

美作の歴史と文化



津山郷土博物館

ごあいさつ

津山郷土博物館は、郷土の文化遺産を継承し、これを現代に活用することを目的として、昭和63年4月に設置された市立の歴史博物館です。津山を中心とする美作地方の地質・考古・文献・美術・民俗などの資料を収集・保管・研究し、その成果を広く一般に公開することを基本方針としています。

当博物館の常設展示では、7つの大テーマで美作地方の地質時代から現代までの歩みを通史的に展示しています。展示はできるだけ抽象的な表現をさけ、模型やイラストなどを活用しながら、平易で親しみやすい展示に心がけています。これからも、調査研究を積み重ね、充実した展示をつくっていく所存です。多くの方々に展示を通じて、美作の歴史と文化にふれていただき、より深く郷土に親しんでいただくことを願っています。

本書はこうした常設展示の内容をわかりやすく紹介した解説図録です。観覧の案内書として、また郷土史学習の手引きとして活用していただければ幸いです。

おわりに、当博物館の常設展示のため、いろいろと御協力を寄せられました関係機関を始め、多くの皆様方に心から感謝申し上げますとともに、今後とも一層の御理解と御支援を賜わりますようお願い申し上げましてごあいさつといたします。

平成元年3月31日

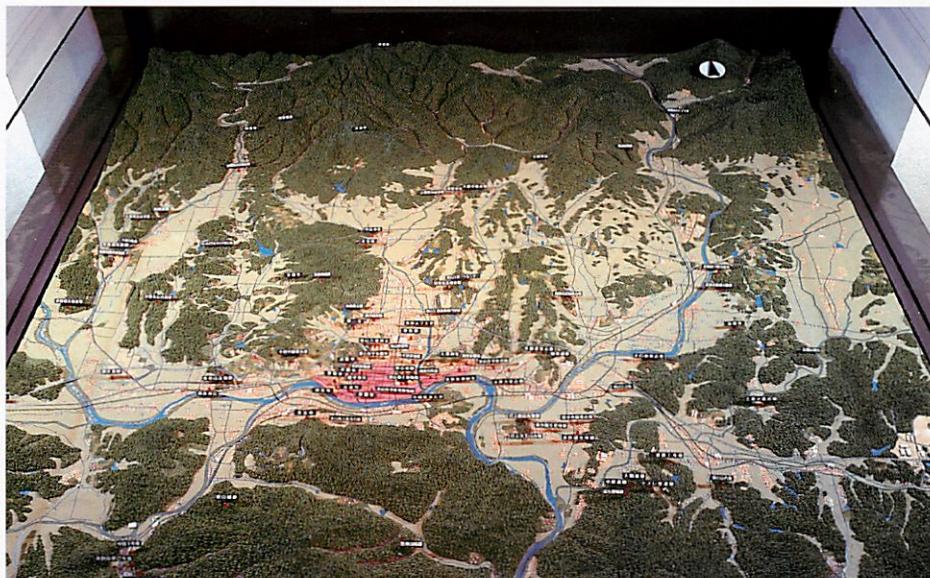
津市教育委員会教育長

福島祐一

目 次

美作の自然と風土	1
美作のあけぼの	5
1 狩猟と採集の生活	6
2 津山の弥生文化	7
3 古墳の時代	11
古代国家と美作	17
1 美作国の成立	18
2 美作国分寺	20
3 古代の鉄生産	22
武士の争いと宗教	23
1 荘園・武士・宗教	24
2 中世の庶民生活	25
3 戦国の争乱	26
津山藩と民衆	27
1 津山城と城下町	28
2 町の生活	34
3 村の生活	36
4 森氏と松平氏	38
郷土の百年	43
1 民衆運動	44
2 学校の歩み	45
3 近代の文化と人物	47
4 津山市の移りかわり	48
美作の美術・工芸	49
利 用 案 内	55
謝 辞	56

美作の自然と風土

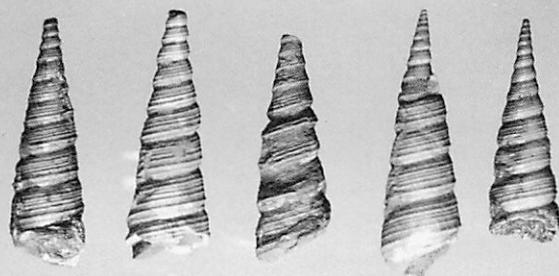


津山市文化財案内模型

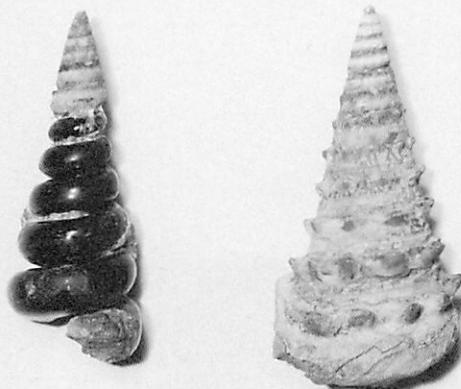
津山盆地の化石

津山盆地の大部分は新第三紀中新世（1500万年前頃）の砂岩、泥岩、礫岩などの地層でおおわれている。この地層は主に津山市の東方でよくみられるので、勝田郡の名をとつて勝田層群と呼ばれている。勝田層群は厚さ300mにも達し、下から植月、吉野、高倉の3層からなっている。これらの地層からは、しばしば古生物の遺体やその痕跡である化石が発見される。

最下層の植月層はもともと起伏のはげしい基盤の地形を川が運んできた礫、砂、泥といった淡水の堆積物が埋め立ててできた地層である。ファグス、サバリテスなどの植物化石が数多く発見される。中層の吉野層は土地の沈降につれて海水の影響のうけたやや塩分のある内湾がつくられて、そこに砂がたまってできた地層である。ビカリヤ（巻貝）、オパー・キユリナ（有孔虫）、トウリテラ（巻貝）などが産出する。津山市上田邑から発見されたパレオパラドキシアもこの地層から産出したものである。最上層の高倉層は海水が進入して泥と砂が固まってできた地層で、オパー・キユリナなどの海棲の生物化石が発見される。



トウリテラ 勝央町美野 産



ビカリヤ 津山市産



アナダラ 勝央町美野 産



クジラ 久世町日木 産



カニ 津山市二宮 産

パレオパラドキシア

新第三紀中新世（1500万年前頃）に北太平洋沿岸に生息していた哺乳類。デスマスチルスという束柱類の仲間。子孫を残さず死に絶えた絶滅獣であるため、その生態はよくわかつていなないが、カバやバクのような姿だったと想像されている。

津山産パレオパラドキシアは、1982年9月、当時の中学生によって発見されたもので、頭蓋・椎骨・胸廓骨・後肢骨を含むほぼ全身の骨格である。体長約2m、体高70cmあまり、体重560kgぐらいと思われる。また体格が小型であること、歯がすりへつていることなどから雌の老獣と考えられる。

当時の津山地方は、マングローブが生い繁る熱帯性の海岸部であった。パレオパラドキシアはこのような暖かい入江で泳いだり、浜辺に上ったりする両生生活をしながら、やわらかい藻類や海草、それにマングローブの実などを食べていたと考えられる。

▼津山産パレオパラドキシア骨格復元模型

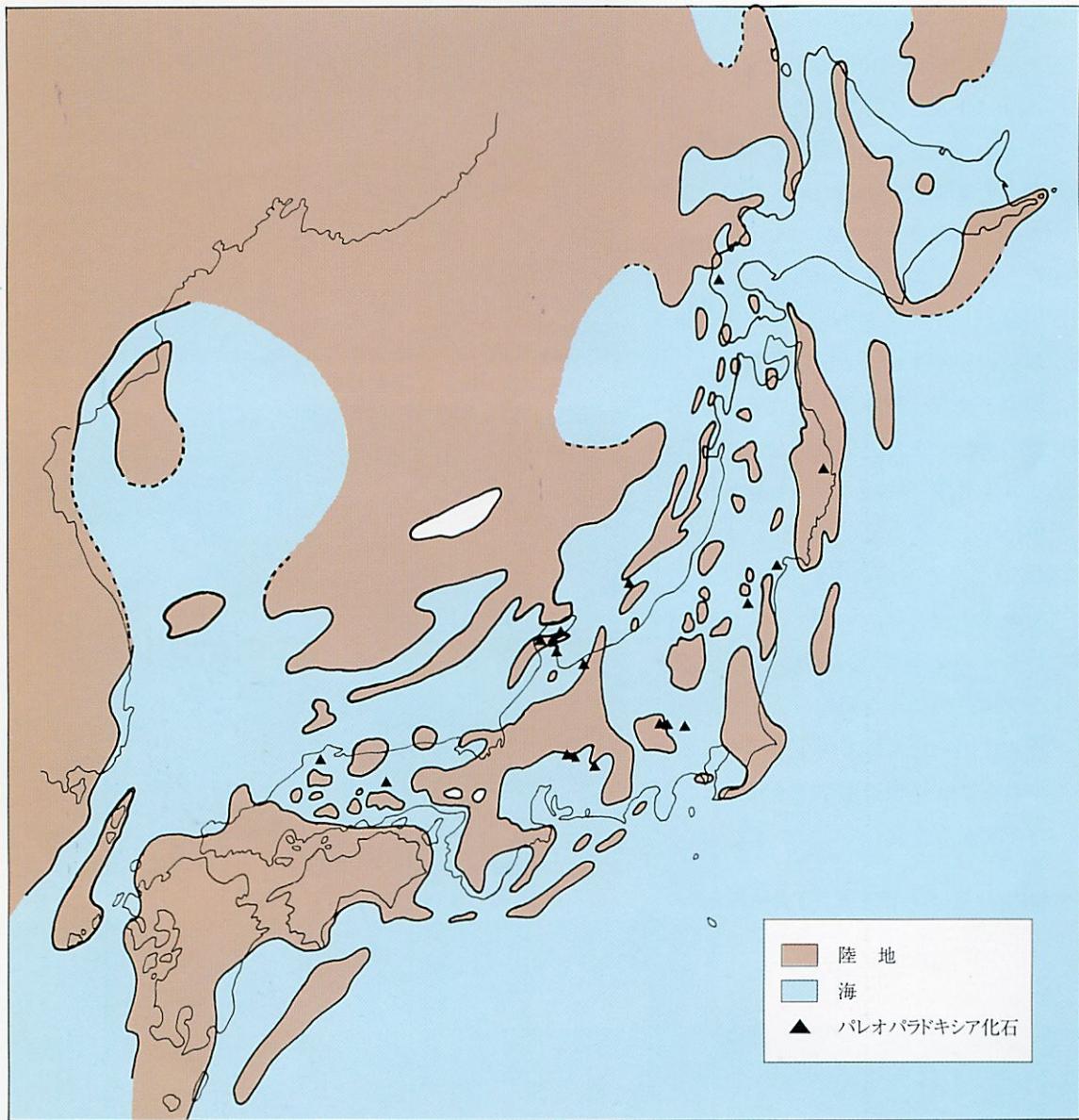


パレオパラドキシアの産出地



▲パレオパラドキシアの発掘風景





新第三紀中新世の海と陸（1500万年前頃） 古地理分布は鎮西清高1981による

パレオパラドキシアの分布

今から1500万年前頃の日本は、大小の島々からなる多島海で、その海をとおって暖流が北海道の南部にまで達していた。島根県西部から能登半島にかけては、東西に細長い海が広がっていた。このような海を昔の瀬戸内海という意味で、「古瀬戸内」とか「第一瀬戸内」と呼んでいる。海岸にはところどころマングローブ沼がみられ、今日の東南アジアのような暖かい環境であった。

日本でのパレオパラドキシアの分布は、北は北海道から南は岡山県まで20数か所を数える。現状

での北限は北海道瀬棚郡北桧山町（小川標本），東限は宮城県仙台市（茂庭標本），西限は島根県八束郡玉湯町（来待標本），そして津山標本が分布の南限となっている。

このうち全身骨格が発見されているのは、津山標本と埼玉県秩父地方産出の2標本（大野原・般若標本），岐阜県土岐市の泉標本，それに津山標本より後に発見された福島県伊達郡梁川町の梁川標本の5例である。なお日本以外ではアメリカカリフォルニア州のスタンフォード標本があるだけである。

美作のあけばの



陶棺展示風景

1. 狩猟と採集の生活

今からおよそ3万年前、美作に初めて人類が現れた。
かみさいばら おんばら ひるせん
上斎原村恩原遺跡や蒜山高原の諸遺跡がその生活の跡である。それから紀元前3世紀頃に弥生文化が成立するまでの長い間、人々は獣や魚を捕ったり、木の実を採集したりする生活を送っていた。石で作った道具を用い、まだ鉄器や青銅器を知らなかった。

今から1万年前頃、縄文土器が発明された。これを境に以前を先土器時代、以後を縄文時代と呼ぶ。美作地方の縄文土器には、円筒形の深鉢が多く、木の棒をころがせて文様をつけた押型文土器、縄目の文様を一部すり消した磨消縄文土器、文様をもたない無文土器などがある。このような土器の使用により、食物を煮炊きすることが可能となり、人々の食生活に大きな影響をもたらせた。



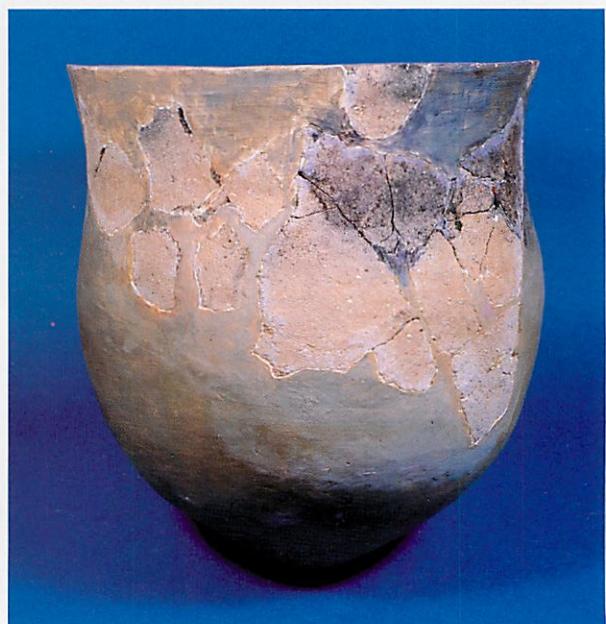
上斎原村恩原遺跡の地層



押型文土器 中和村別所遺跡出土 美甘隆夫氏蔵



旧石器 上斎原村恩原遺跡出土



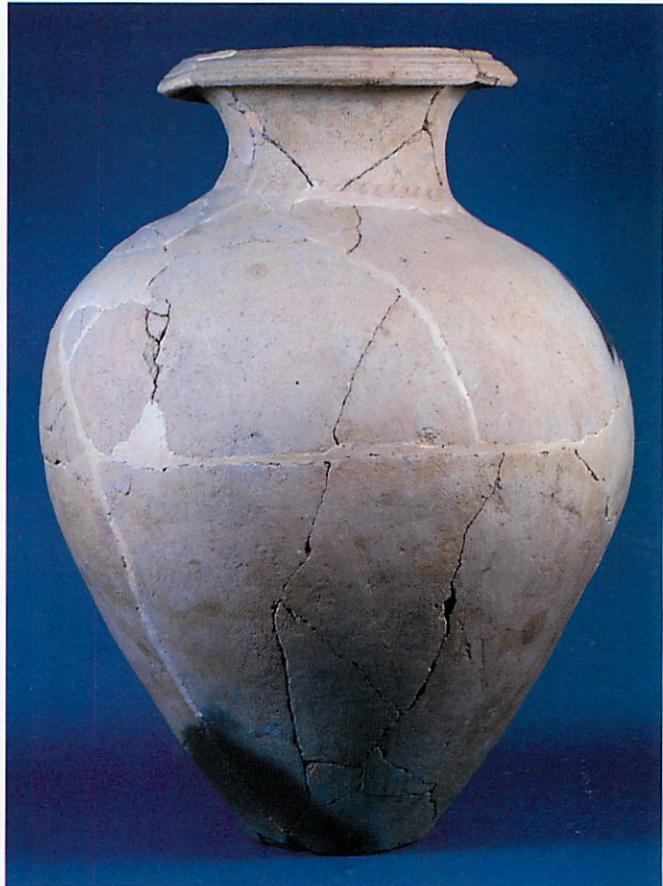
無文土器 津山市クズレ塚古墳下層出土

2. 津山の弥生文化

紀元前3世紀頃、朝鮮半島から稻作と金属器を備えた文化が日本に伝わってきた。前期の稻作は主に自然灌漑が可能な西日本の臨海沖積地で行われ、東日本や西日本山間部へはやや遅れて拡がった。

美作に人々が広汎に定住し始めたのは中期以降である。中小の河川流域の小高い丘陵などに堅穴住居・高床倉庫・貯蔵穴などからなるムラのあとやムラの成員を埋葬した共同墓地のあとが数多く残されている。

後期になると、このような集団墓の他に方形台状墓や墳丘墓と呼ばれる特定の個人またはグループを葬った墳墓が出現していく。そしてこれらの墳墓にはしばしば特殊壺・特殊器台という装飾的な土器が供献される。このような墓制のありかたは、当時の社会に富や権力が次第に芽生えつつあったことを示している。



弥生土器壺 津山市一貫東遺跡出土



弥生土器各種 津山市内出土



弥生土器高杯 津山市京免遺跡出土



弥生土器高杯 津山市京免遺跡出土

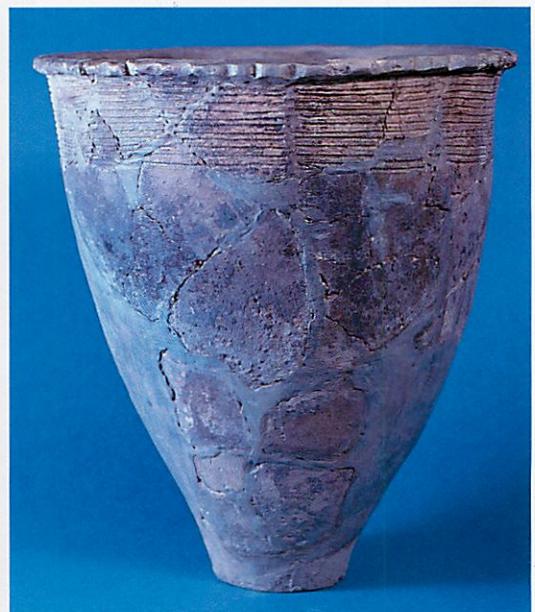


弥生土器器台 津山市西吉田遺跡出土

弥生土器

弥生時代に使われた赤褐色の素焼の土器を弥生土器といいます。食物や水などを貯えるための壺、米などを炊いた甕、食物を盛るための鉢や高杯、壺などをのせる台としての器台などの種類がある。

壺は丸い体部の上にアサガオ形に開く口をのせたもので、一般に装飾が豊富である。まれにヒヨウタヌのひさごつまうな形をした瓢壺もある。甕は大きく口を開く丈の高いもので、ススでよごれているこ



弥生土器甕 津山市京免遺跡出土

とが多い。鉢は口が大きく、丈の低い器である。甕や鉢は形が単純で、装飾の少ないものが多く、主に日常用に使用された。高杯は皿のような浅い器に脚をつけたもの。器台は高杯などの脚の部分が独立化した中空の台である。高杯や器台は美しく飾られていることが多く、主として祭祀に用いられた。

他に特殊な用途として、壺や甕に乳児を埋葬した甕棺がある。

弥生時代の道具

弥生時代を特徴づける道具は鉄器と青銅器である。鉄器には斧・手斧・鎌などの木工具、鍬先・鋤先・鎌などの農具、剣・刀・鎧などの武器がある。一方青銅器は鏡・劍・銅鐸・腕輪など祭りの道具や装身具としてのみ用いられた。

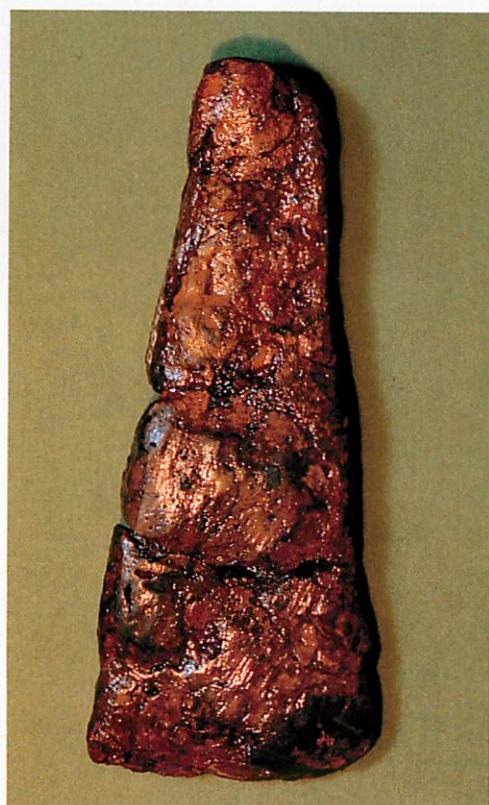
弥生時代には金属器とともに石器も盛んに使用された。木を倒し荒削りするための大型蛤刃石斧、荒削りした木を削ったり抉ったりするための柱状片刃石斧と扁平片刃石斧、稲を穂摘みするための石包丁、矢の先につけて用いる石鏃などがある。



土製勾玉 津山市大畠遺跡出土



銅 鐸 勝央町植月出土



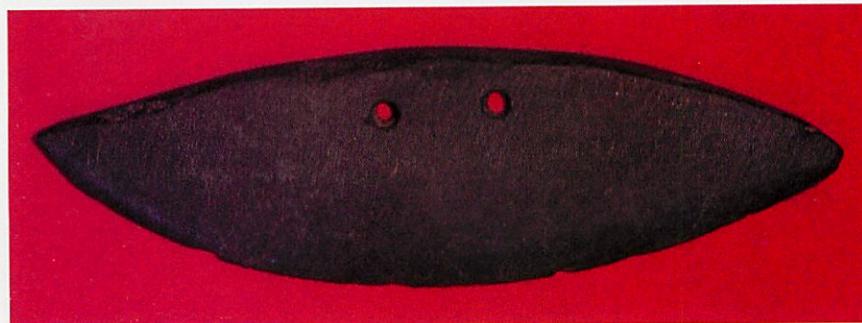
鉄 斧 津山市ビヤコ谷遺跡出土



鎌 (やりがんな) 津山市内出土



扁平片刃石斧 津山市内出土



石庖丁 津山市十二社遺跡出土



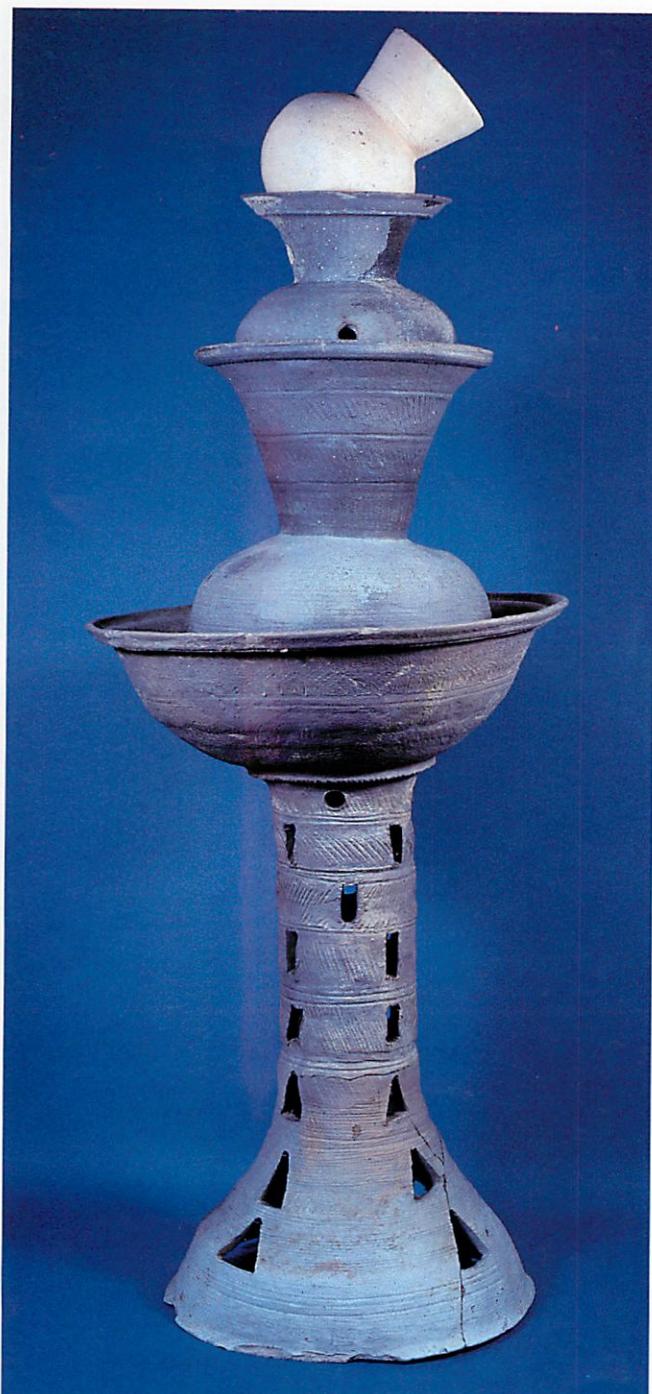
大型蛤刃石斧 左 津山市八出出土 右 落合町西原出土



柱状片刃石斧 津山市東藏坊遺跡出土



石棒 津山市十二社遺跡出土



四ツ重ネ土器 津山市中宮1号墳出土
下から須恵器器台・須恵器広口壺・須恵器甕・土師器壠

3. 古墳の時代

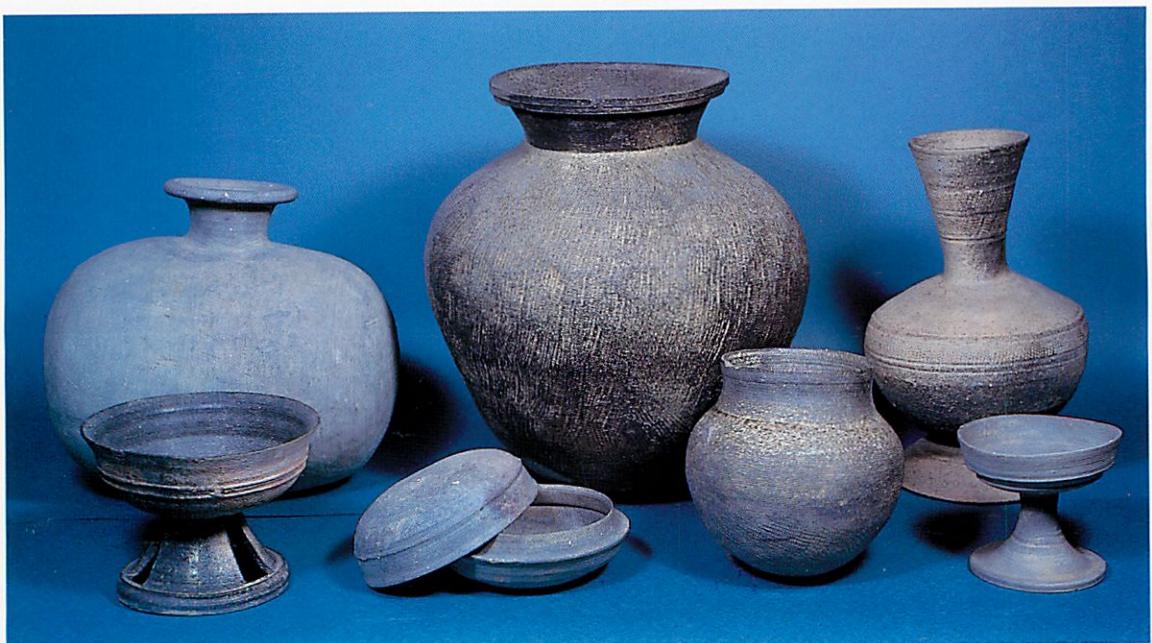
古墳とは土を高く盛った墓のことである。4世紀から7世紀にかけて盛んに作られた。前方後円墳・前方後方墳・円墳・方墳など様々な形がある。このうち前方後円(方)墳や大型の円・方墳は豪族の墓である。一方、5世紀後半頃から直径10数mの小型の円墳が群集して作られるようになる。これらは村の有力者を葬ったものと考えられる。

美作における最古の古墳は、鏡野町觀音山古墳である。吉井川右岸の丘陵上にあるこの古墳は全長43mの前方後円墳で、三角縁神獣鏡などが出土した。4世紀前半頃のものと思われる。以後、4世紀後半から5世紀にかけて、美作町植原寺山古墳(全長54m)、勝央町植月寺山古墳(全長85m)、津山市日上天王山古墳(全長55m)、津山市美和山1号墳(全長79m)などの前方後円墳(方)墳が相次いで作られた。この中で美作東部の吉野川水系に前方後方墳が集中していることが注目される。

美作の代表的な群集墳として津山市日上天王山古墳群、津山市佐良山古墳群があげられる。前者は吉井川と加茂川の合流点東南の丘陵上にある60余基の小円墳群で、5世紀後半から6世紀前半にかけてのものである。後者は吉井川の支流皿川両岸の山塊に散在する200基あまりの古墳群で、6世紀後半から7世紀にかけて作られた。

このような古墳には、鏡・筒形銅器などの祭器、鉄製の刀剣・鎌・馬具などの武器・武具、玉・金環などの装身具、須恵器・土師器などの土器類などが副葬されている。このうち須恵器は5世紀中頃に朝鮮半島から伝わった硬質の土器で、6・7世紀の古墳から多数出土する。

これらの遺物は当時の社会が発達した手工業生産の段階にあることを示している。



須恵器各種 津山市内出土



須恵器子持ち高杯 津山市ズリ谷1号墳出土



筒形銅器 勝央町岡高塚古墳出土



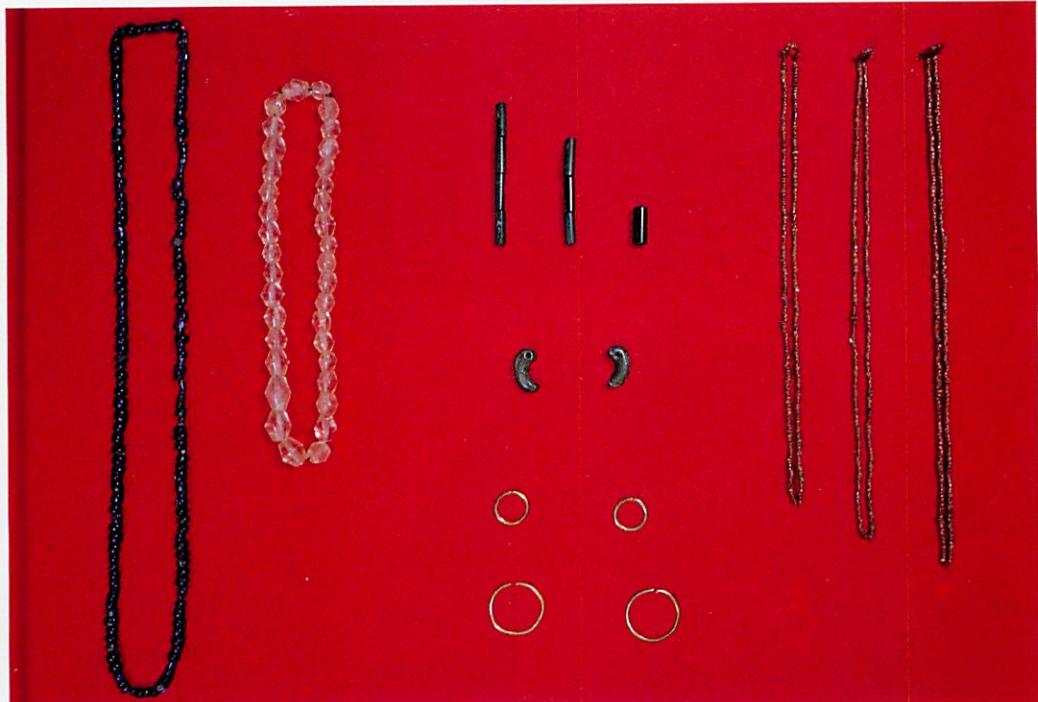
鋸齒文鏡 津山市大篠出土



変形方格規矩鏡 津山市天神原4号墳出土



環頭大刀 津山市天神原1号墳出土



装身具（丸玉、切子玉、菅玉、勾玉、金環、小玉） 津山市内出土

古墳時代の装飾付大刀 たち

古墳時代の大刀には、実用品の他に
つかがいら
把頭などに華麗な装飾を施した儀礼用
の太刀がある。把頭に環状の飾りをつけた環頭大刀、玉器の圭に似た山形を
かんとう
呈する圭頭大刀、まるみを帯びた形の
けいとう
円頭大刀、拳状を呈する頭椎大刀が知
えんとう
かれている。これらの把頭には金銅製
や銀製の例が多く、時には銀などで象
かん
嵌を施したものもある。

津山市天神原1号墳出土の環頭大刀
すかしば
は環内に双龍を透彫りしたもので、2
頭の竜が玉を加えあってる様を表わ
している。7世紀前半頃のものである。
津山市柳谷古墳出土の頭椎大刀は鉄製
きつこうもん
の把頭で、表面全体に亀甲文や花弁文
かべんもん
などによる銀象嵌を施したものである。
また鞘尾にも羽状文の銀象嵌を施して
さやじり
いる。7世紀初頭頃のものである。

これらの装飾大刀は大和政権とつな
はいよう
がる人物の佩用したものであろう。



銀象嵌頭椎大刀把頭 津山市柳谷古墳出土



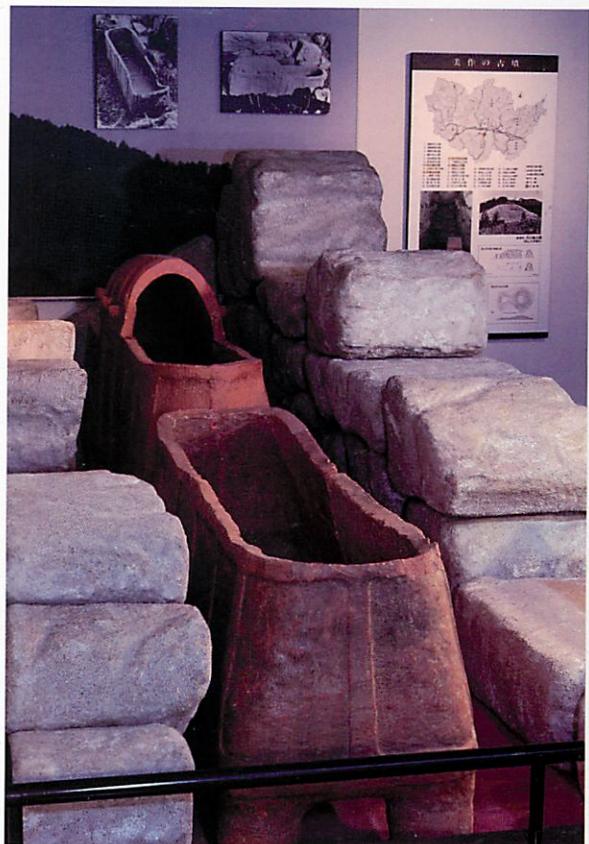
銀象嵌鞘尾金具 津山市柳谷古墳出土

とう かん
陶 棺

粘土を焼き固めて作った棺。6・7世紀に古墳の中の埋葬施設として用いられた。身と蓋からなり、身には多数の脚がついている。身・蓋ともに2分割されているのが普通である。赤褐色で軟かい土師質陶棺と青灰色で固い須恵質陶棺に大別される。土師質陶棺には亀甲形と家形（切妻形・四注形）があり、須恵質陶棺は家形（切妻形・四注形）のみである。

陶棺の分布は非常にかたよっており、美作・備前で全国の約70%，大和・山城などの畿内が約20%を占め、他は備中と播磨がやや目立つ程度で、それ以外の地方ではきわめてまれな存在である。とくに土師質陶棺では全体の約70%が美作から出土している。

このように、陶棺は古墳時代の美作を代表する特徴的な遺物であるが、なぜ特定の地域に集中するのか、またその被葬者がどのような人物であったのか、まだ詳しくはわかっていない。



祇園畠 2号墳石室復元模型



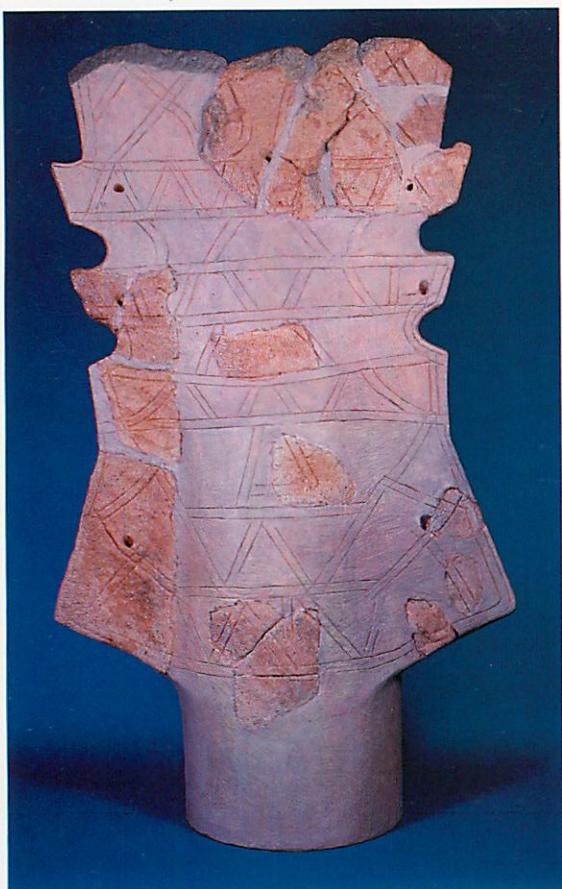
土師質亀甲形陶棺 津山市寺山古墳出土

はに
埴
輪

古墳の外表に立て並べる素焼の土製品。円筒埴輪えんとうと形象埴輪けいしょうに2大別される。円筒埴輪は弥生時代の特殊器台から分化したもので、円筒形で外面に数条の凸帯をめぐらし、凸帯の間に相対する一対の孔を開ける。なお円筒の上部がアサガオ状に大きく開くものを朝顔形円筒埴輪と呼ぶ。

形象埴輪には切妻屋根・入母屋屋根などの家形埴輪いりもや、盾・韁・甲冑・蓋・船などの器財埴輪、兵士・農夫・巫女などの人物埴輪、馬・猪・水鳥などの動物埴輪がある。これらはそれぞれの種類によって出現の時期を異にしている。すなわちまず4世紀中頃に家形埴輪と器材埴輪の一部が現われ、ついで5世紀初頭頃に動物埴輪が加わり、最後に5世紀後半頃に人物埴輪が出現する。そして関東など一部の地域を除き、6世紀後半にはすべての埴輪は消滅する。

これらの埴輪は古墳上で行われた葬送儀礼に用いられたものであるが、古墳という聖域を区画し、それに莊厳さを加える役割をもはたしていたと考えられる。



盾形埴輪 津山市畝山古墳群出土



人物埴輪 津山市畝山古墳群出土

古代国家と美作

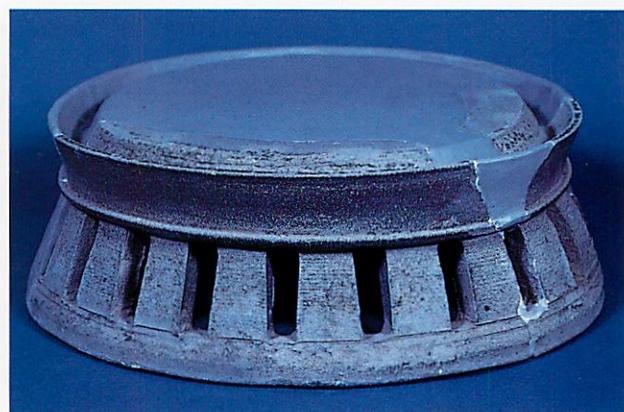


美作国府の井戸（模造）

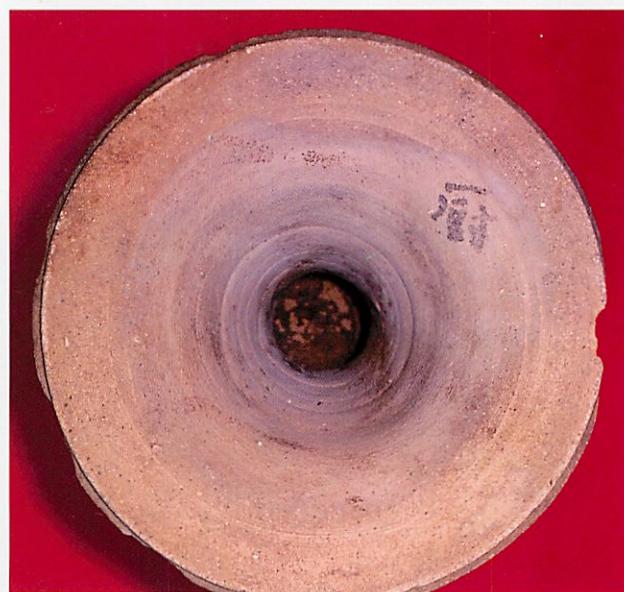
1. 美作国の成立

和銅6年（713），備前国から英多・勝田・
苦田・久米・大庭・真島の6郡を割いて，始
めて美作国が置かれた。国とは国内の民政・
軍政全般を統括する官庁で，その国司は守・
介・掾・目の四等官からなり，都から貴族が
赴任してきた。国の下の郡は一般民政を掌る
役所で，その郡司には大領・少領・主政・主
帳の四等官があり，地元の豪族が任命された。
郡の下には50戸からなる里（後に郷）が置か
れた。民衆は公民としてその一人一人に至る
まで戸籍・計帳に登録され，租・庸・調・雜
徭・公出挙・兵役など各種の租税や力役を國
家に負担した。

美作国府は津山市総社宇幸畠を中心とする
一角にあった。国府の構造は正殿・前殿・後
殿・東西脇殿が左右対象に整然と並ぶ政庁部
分と，それをとりまく官衙施設からなる国衙
域と，さらにその外に都市的機能をもつ国府
域からなる3重の構成をしていたと考えられ
ている。美作国府の最近の調査で政庁の一部
とみられる東西棟掘立柱建物（SB 101）など
が検出された。



円面観 美作国府跡出土 高谷宗勝氏藏



墨書き土器「厨」 美作国府跡出土



木簡（複製）原物1・3～5 奈良国立文化財研究所蔵（奈良国立文化財研究所許可済）2 京都府向日市教育委員会蔵



軒丸瓦 美作国府跡出土



丸瓦 美作国府跡出土



須恵器蓋杯 美作国府跡出土



緑釉陶器 美作国府跡出土

2. 美作国分寺

インドで発生した仏教は、中国・朝鮮を経て、6世紀中頃に日本に伝來した。当初は朝鮮半島からの渡来人の間で受容されたが、やがて當時大臣の地位を世襲していた蘇我氏の庇護をうけることになった。そして律令国家の成立とともに、天皇や国家の安寧をはかる国家仏教の様相を強めていった。天平13年（741），聖武天皇は国分二寺創建の詔を下した。これは当時60余国あった国ごとに国分僧寺と国分尼寺の造営を命じたもので、発願の理由は五穀豊饒と國家の繁栄を祈願することにあった。

美作国分寺跡は古くから津山市国分寺の天台宗国分寺付近にあったと考えられてきた。1977年から79年にかけての一連の発掘調査により、主要伽藍と寺域の状況がほぼ確認された。それによれば、およそ210m四方（方2町）の寺域中央に南門・中門・金堂・講堂が南北一直線に並び、回廊が中門と金堂を結び、その東南外に塔をおくといいわゆる国分寺式の伽藍配置をとっている。主要伽藍はすべて礎石建ち瓦葺の建物である。国分尼寺跡は国分寺跡の西約450mの地にあるが、小規模な建物址などが見つかっただけで、伽藍や寺域の状況はわかっていない。

これら国分二寺は奈良時代中頃に創建され、奈良時代末ないし平安時代初頭と平安時代中頃ないし後半の二度にわたる改修を経て、平安時代末頃に古代国家の衰退とともに廃絶したものと考えられる。



八稜鏡 美作国分寺跡出土



鬼瓦 美作国分寺跡出土



軒丸瓦・軒平瓦 上 美作国分寺跡 下 美作国分尼寺跡
出土



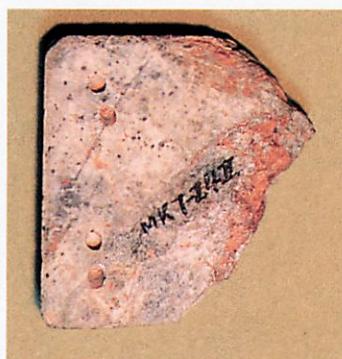
軒丸瓦・軒平瓦 美作国分寺跡出土



丸瓦 美作国分寺跡出土



隅平瓦 美作国分寺跡出土



石帶 美作国分寺跡出土



博 美作国分寺跡出土



軒丸瓦・軒平瓦 美作国分寺跡出土



軒丸瓦・軒平瓦 美作国分寺跡出土

3. 古代の鉄生産

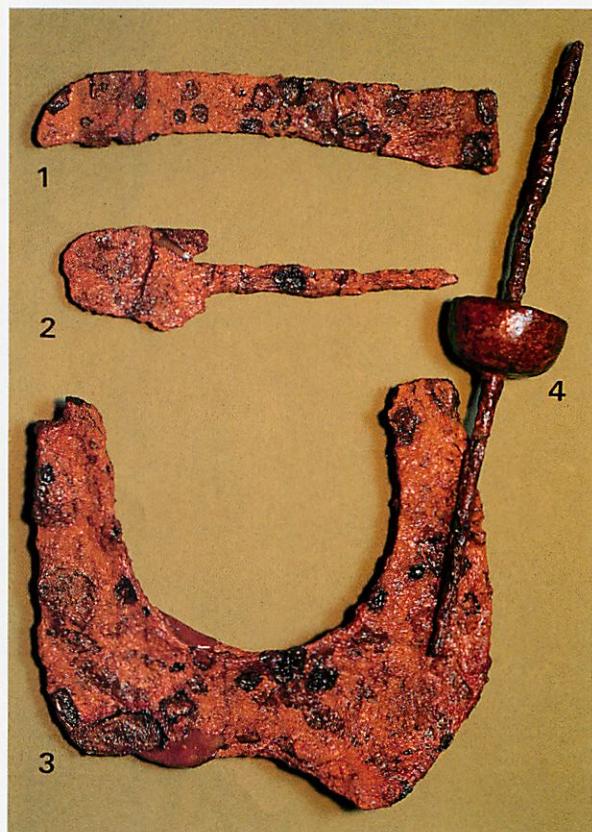
「真金吹く吉備」と古歌に詠まれたように、美作を中心とする吉備地方山間部は古代鉄生産の中心地であった。津山市沼遺跡^{やりがんな}で鉈、同ビシャコ谷遺跡^{てっぷぶ}で鉄斧が出土していることから、美作における鉄器の使用が弥生時代中期に遡ることは確実である。しかしこのことがただちに製鉄の開始を示すものではない。次の古墳時代には古墳の副葬品として多量の鉄製品が存在するが、これらが国内で作られたものか、それとも朝鮮半島から原料を輸入して作られたものかよくわかっていない。

美作における製鉄の開始を示す確実な証拠は、久米町大蔵池南製鉄遺跡、津山市緑山遺跡^{みどりやま}で発掘された製鉄炉の存在である。これらは6世紀末～7世紀前半のものと考えられている。また製鉄に関連する遺構に炭窯がある。これは製鉄に使用する木炭を焼成したものである。さらに製練や鍛冶の過程でできる廃棄物である鉄滓^{せいけん}も間接的ながら製鉄の存在を示すものである。美作の5～7世紀の古墳からはしばしばこの鉄滓が出土するが、これらの化学分析によると、6世紀前半以前の鉄滓は大部分鍛冶滓で、製練滓は6世紀後半以降に集中するという。このように美作における製鉄の盛行は6世紀以降と考えられるのである。

奈良時代には勝田郡和氣郷（現柵原町）から都に鉄を貢納したことを示す木簡がある。当時の歴史書である『続日本紀』には美作国大庭・真島両郡の税の品目を米から鉄に変えることが記されている。また10世紀初頭の法律書である『延喜式』でも美作国から鉄の貢納のことが明記されている。



鍛冶炉 津山市狐塚遺跡出土

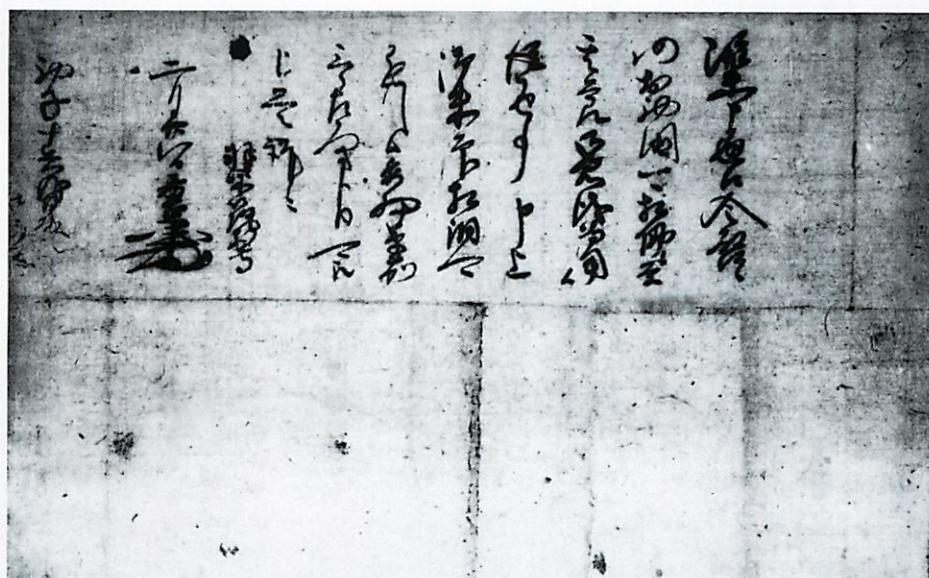


鉄器（1 鎧 2 鎌 3 鋤先 4 紡錘車）津山市内出土



鉄滓堆積状況土層転写 津山市一貫西遺跡

武士の争いと宗教



羽柴秀吉書状 牧山政雄氏蔵

1. 莊園・武士・宗教

平安時代中頃、地方の豪族や有力農民による土地の開発が進んだ。彼らは国司や郡司の干渉から自分の土地を守るために、それを中央の有力な貴族や寺社に名目的に寄進した。これを莊園といい、中央の莊園領主を本所・領家、地方の豪族らを莊官と呼ぶ。平安時代末になると莊官らは武力を蓄えはじめ、やがて平氏・源氏など武家の棟梁との主従関係を深めていった。鎌倉幕府が守護・地頭を任命すると、地頭は莊官の権限を蚕食していった。また室町時代には守護は半濟法により莊園年

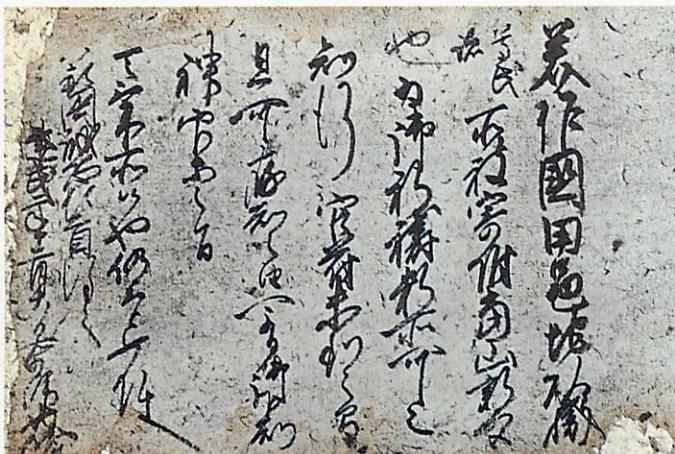
貢の半分を吸収するなど、莊園制は次第に衰退していった。

鎌倉時代は民衆の宗教が開化した時代であった。
法然の淨土宗、親鸞の淨土真宗、日蓮の法華宗、
一遍の時宗など民衆の救済をめざす新佛教が相つ
いで興った。法然（源空）は長承2年（1133）、
美作国久米郡稻岡莊（現久米郡久米南町里方）の
地に生まれた。幼くして父と死別し、比叡山延暦
寺で修行し、ついに阿弥陀仏の本願を無条件に信
じて念佛を修する淨土宗を開宗した。法然の宗教
は相次ぐ戦乱の中で成長した新興の武士階級や民
衆の間に広く侵透していった。

美作國田邑地頭職、
跡尊氏所被寄附当山新宮
也、為御祈禱料所、可令
知行、官符未到之間、
且可存知之由、可有御下知
神官等之旨、
天氣所候也、仍言上如件、

範國誠恐頓首謹言、
建武二年十二月十八日
(二三三五)
熊野山檢校僧正御房政所

右少弁(花押)



後醍醐天皇綸旨（複製） 原物 和歌山県 熊野速玉大社蔵



法然上人行状絵図（複製） 卷1段4（部分） 原物 京都市 知恩院蔵

2. 中世の庶民生活

鎌倉時代から室町時代にかけては、農業・手工業・商業など産業の発達がめざましかった。

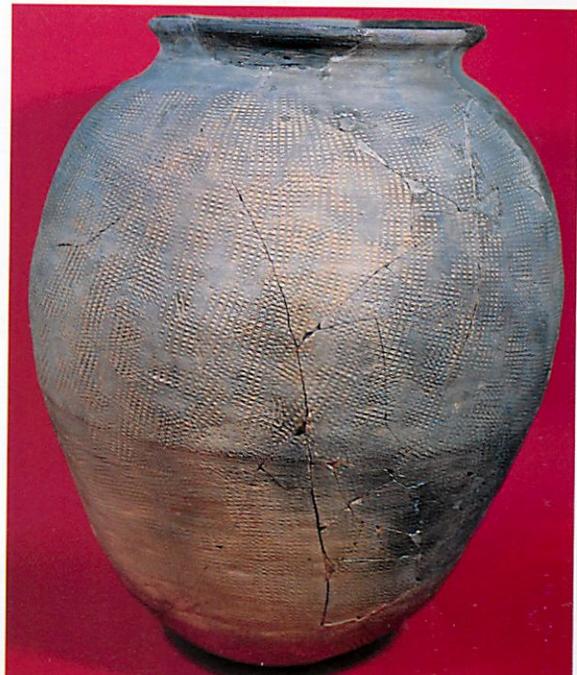
平安時代末から鎌倉時代にかけて美作の地で盛行した焼きものに勝田焼がある。これは古墳時代以来の須恵器の系統を引くもので、甕などの表面に格子目の叩きをもつ点が特徴である。勝田郡勝央町の勝間田盆地を挟んだ南北の山塊に20数基の窯跡が知られている。甕・壺・鉢・椀・小皿などの種類があり、庶民の日常雑器として美作全体に広く流通した。

鎌倉・室町時代の岡山県地方では、備前市の備前焼、倉敷市の亀山焼、勝田郡の勝田焼のように一国ごとに焼きものが生産されたが、鎌倉時代末頃から備前焼が盛んとなり、他の焼きものは衰退してしまった。

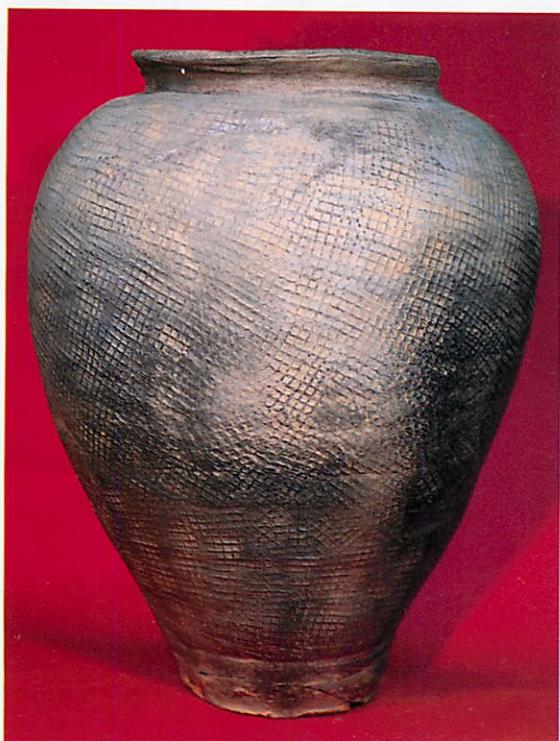
また、この時代は日中貿易が盛んで、中国から宋銭・元銭などの貨幣や青磁・白磁などの高級品が大量に輸入され、商業の発達や地方文化の向上に寄与した。



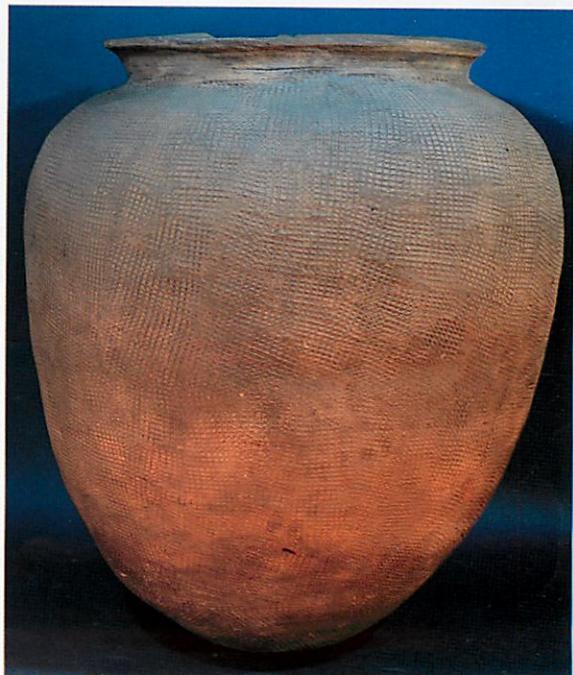
勝田焼椀 津山市高橋谷遺跡出土



勝田焼大甕 津山市西吉田遺跡出土



亀山焼大甕(経筒外容器) 津山市万福寺経塚出土



勝田焼大甕 美作町間山出土

3. 戦国の争乱

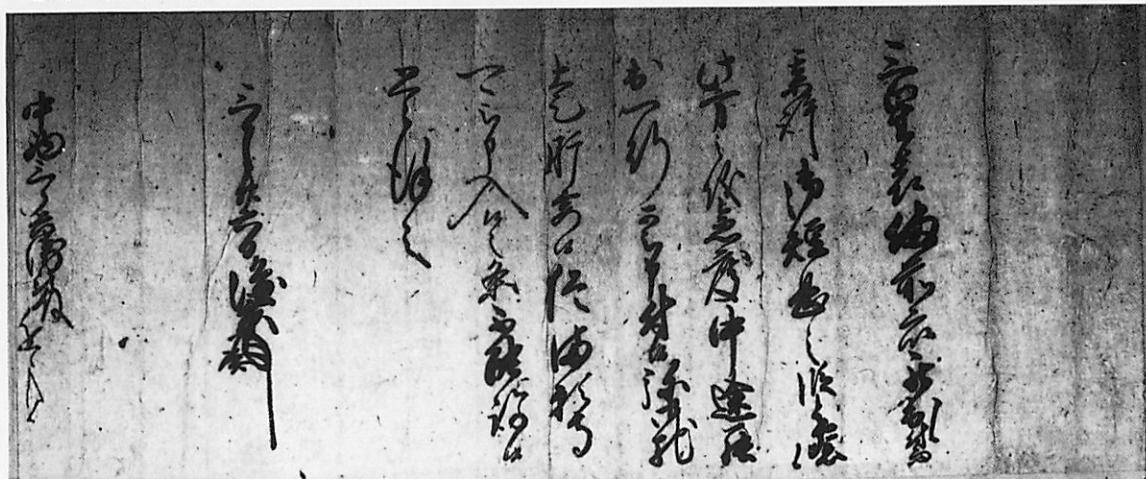
1467年に勃発した応仁の乱は、守護の領国支配を根底からくつがえした。国内の守護代や有力国人らは主家の守護を滅ぼし戦国大名に成長していく。彼らは富国強兵に努め、全国各地で争乱をくり返した。

美作守護は室町時代、赤松氏と山名氏との間で

争奪がくり返されていた。戦国の争乱が始まると、出雲から尼子晴久が美作に侵入し、1551年頃ほぼ全土を制圧した。1566年尼子氏が滅亡してからは、安芸の毛利元就、播磨の浦上宗景、備前の宇喜多直家が相ついで美作に侵攻した。浦上氏の滅後は織田信長に従う直家と毛利輝元との間に激しい戦闘がくり広げられたが、豊臣秀吉の全国統一過程で、1584年美作は宇喜多秀家により平定された。



毛利輝元書状 牧山政雄氏蔵



小早川隆景書状 牧山政雄氏蔵

下

三星表備前衆罷出候付而、
某許御短息之段令察候、
此方之儀、急度中途罷
出、一行可被申付候、弥御馳
走肝要候、猶満願寺
可被申入候之条、不能詳候、
恐々謹言、

三月廿六日 小早川 隆景 (花押)

中西三郎兵衛尉殿
進之候

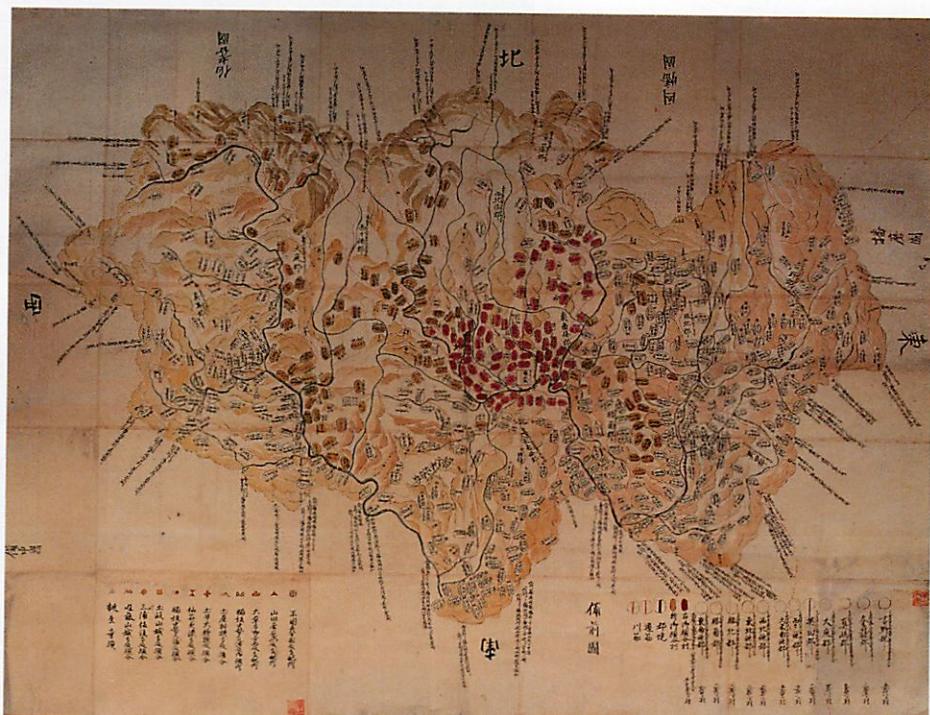
中西三郎兵衛尉殿

三月十七日 毛利 輝元 (花押)

先年院庄被籠城、粉
骨之次第、慥令承知之、
祝着之至候、當時景継(草切)
談候之条、弥御馳走肝
要候、猶満願寺(有勢)可申候、
恐々謹言、

上

津山藩と民衆

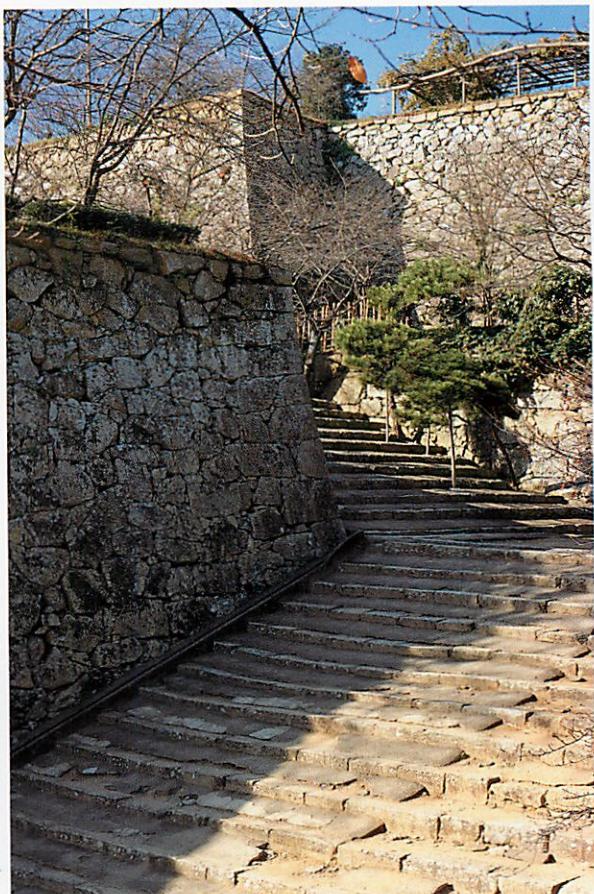


美作国絵図 文政元年（1818）

1. 津山城と城下町

津山城は美作一国を領して津山に入封した森忠政が、鶴山（中世の城跡）に築いた平山城で、鶴山城とも呼ばれる。慶長9年（1604）に起工し、元和2年（1616）に完成した。本丸内には天守閣をはじめ、城主の住まいである備中櫓や、粟積櫓・月見櫓など大小30余の櫓、それに70余の部屋からなる御殿が作られた。三ノ丸、二ノ丸をへて本丸に入る通路は防禦のため曲接し、要所には堅固な門を配置している。三ノ丸の周辺には上級武士の屋敷が配され、北・西・南は外濠によって囲み、東は宮川により天然の要害をなした。

城郭のまわりの平地部には、中・下級武士の居住地や職人町・商人町などの町人町、それに寺院街が形成された。これらの城下町は東の宮川と西の蘭田川によって区切られる中央部、丹後山南西麓の東部、蘭田川以西の西部の3地区から構成される。その中央部は慶長・元和期に出来あがり、正保期には東西周辺部の町も城下に組み入れられるとともに、東西2か所の寺町もほぼ完成した。



津山城跡表中門付近



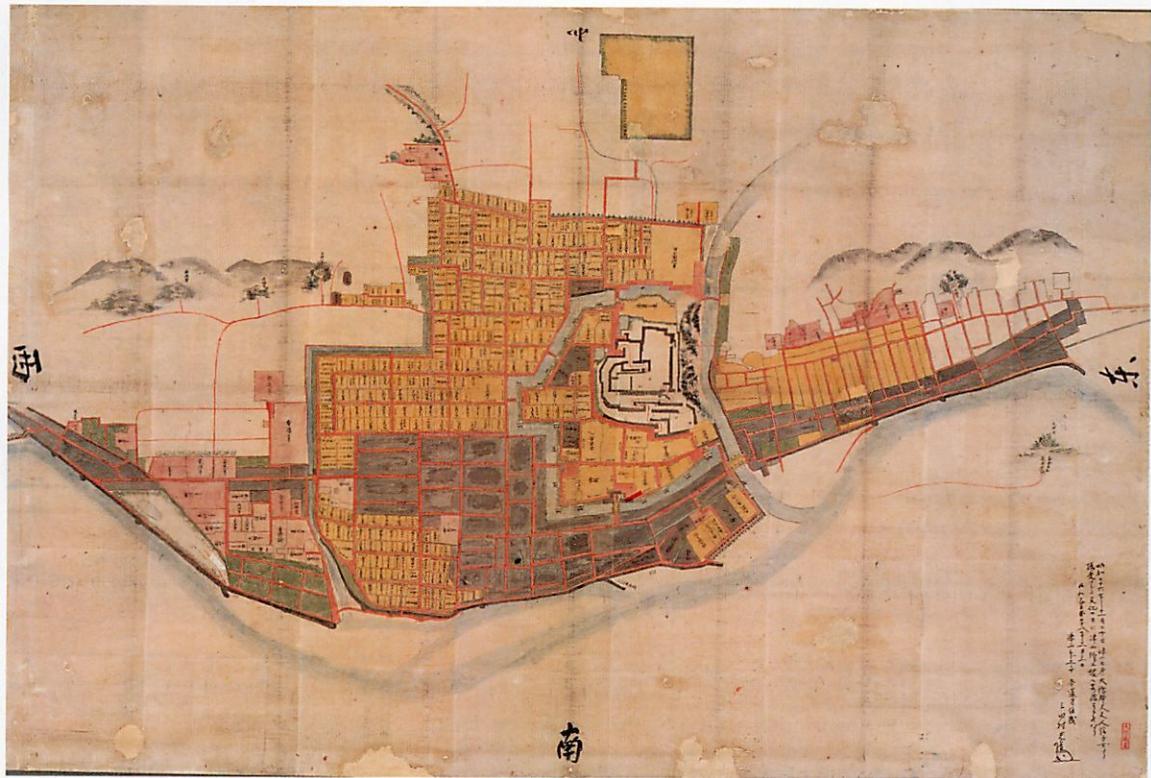
津山城復元模型 南西面 縮尺 150分の1



津山城絵図



津山城古写真 西北面 明治初年頃



津山城下町絵図 正徳年間（1711—1715）

城東の町並み

津山城下町のうち宮川以東には出雲往来に沿って町人町が6町と、その北に隣接して武家屋敷地、寺院街があった。この城東地区には街道にそって西から橋本町・林田町・勝間田町・中之町・西新町・東新町の各町人町が東西に並ぶ。ただし城下町が作られた当初には東新町・西新町を林田新町、中之町を東鉄砲町、勝間田町を林田勝間田町と称していた。

町人町の北に隣接する地域が上の町である。東西に細長く延びており下級武士や足軽・中間の居住区域である。中央のやや北側を東西に道がとおり、出雲往来と14本の小路でつながっていた。



市重文 鰐口 慶長18年（1613） 津山市 妙法寺蔵
「慶長十八年曆癸丑 作州津山富川村妙法寺」
「津山」の名称を用いた最古の史料である。



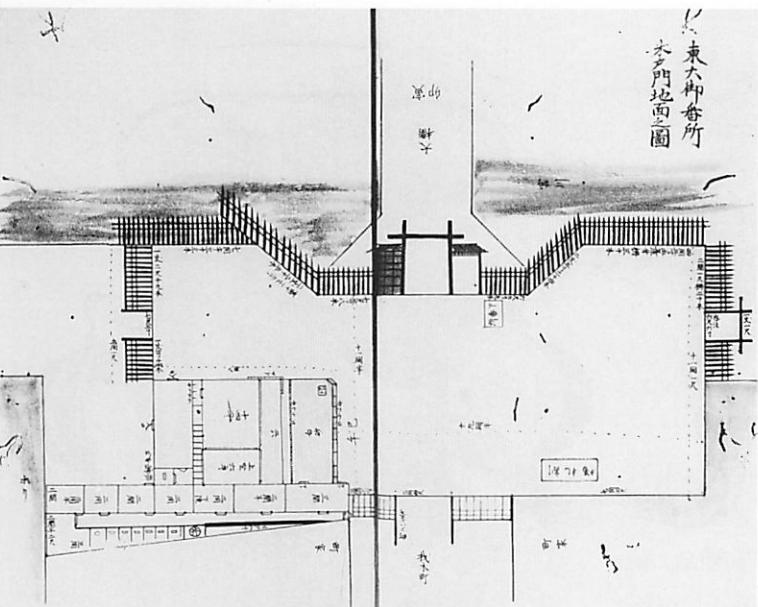
美作国津山家数役付惣町堅横関貫橋改帳 元禄10年(1697) 玉置芳久氏藏 同左

戸川町絵図 (部分)

西大御番所圖



西大番所圖（同左）



東大番所圖（『八箇所御番所図面』）元治元年（1864）



キリシタン訴人制札 正徳元年（1711）



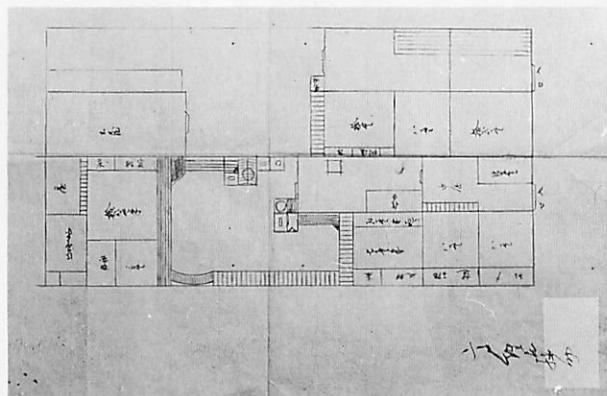
放火禁止定高札 正徳元年（1711）

2. 町の生活

津山城下町には33の町人町があった。元禄10年（1697）頃には約16,000人の町人が住んでおり、鍛冶屋・桶屋・髪結・古道具屋・豆腐屋・魚屋・酒屋等々さまざまな商工業を営むもの、医師や神官、農村に出かけて農業に従事するものなどがあった。彼らは地子（地租）を免ぜられていたが、町役という町人の義務を負わされており、出火・洪水の際の防火・水防、堀や大溝掃除には各町で定められた人数に従って人足を出し、また「二季割」といって、町役人（大年寄や町年寄）の職務や各町ごとに必要な経費を支払うよう義務づけられていた。日常生活は藩が定めたさまざまな法令に制約されることが多いが、毎年9月におこなわれる大隅・徳守両宮の祭礼では、各町ごとに屋台や御輿太鼓を引回して都市生活を楽しんだ。



味噌屋看板 玉置明正氏蔵



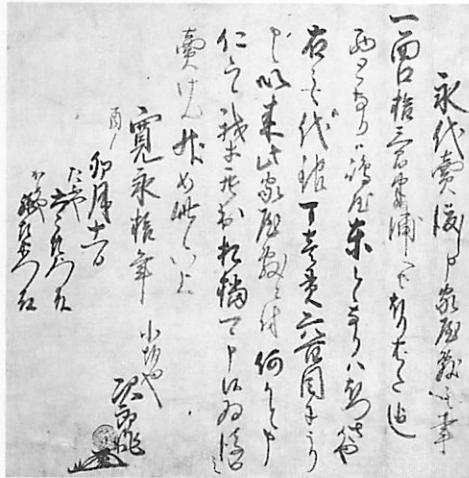
商家屋敷間取図



卸売の免札 玉置芳久氏蔵



髪油屋看板 玉置明正氏蔵



家屋敷壳渡状 寛永10年（1633）

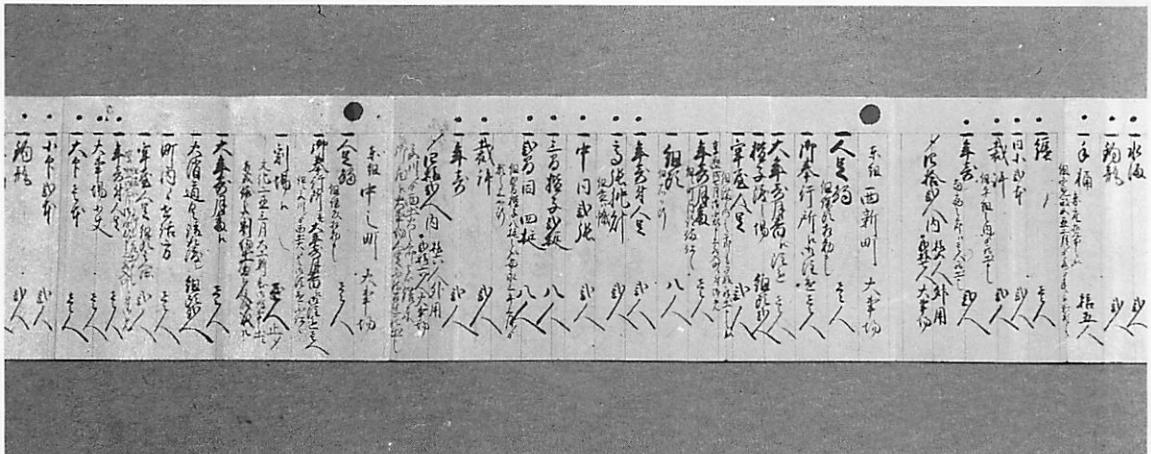
間口13間半の家屋敷地を銀1貫 600匁で壳渡した壳渡証文である。



火消装束



桶屋一統定 寛政11年（1799）



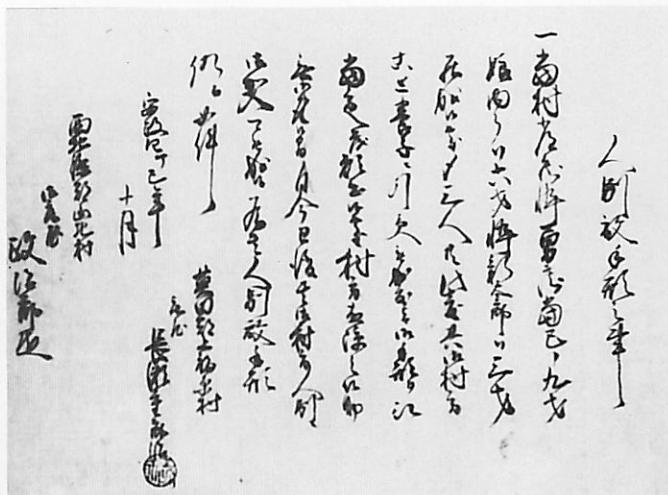
町火消役割帳（部分）文化5年（1808）

3. 村の生活

江戸時代の農村では、藩経済の基盤である年貢を負担することを義務づけられており、主要な生産物である米の大半を藩に納めた。農民の中には、割り当てられた年貢を納めることができないため田畠を質入したり、他の農家に雇われて暮すものもあり、飢饉や災害の時には多くの農民が苦しんだ。

日常生活は幕府や藩が定めた法令に制約されており、それぞれの村では共同の責任をもたせるための五人組の制度が作られていた。

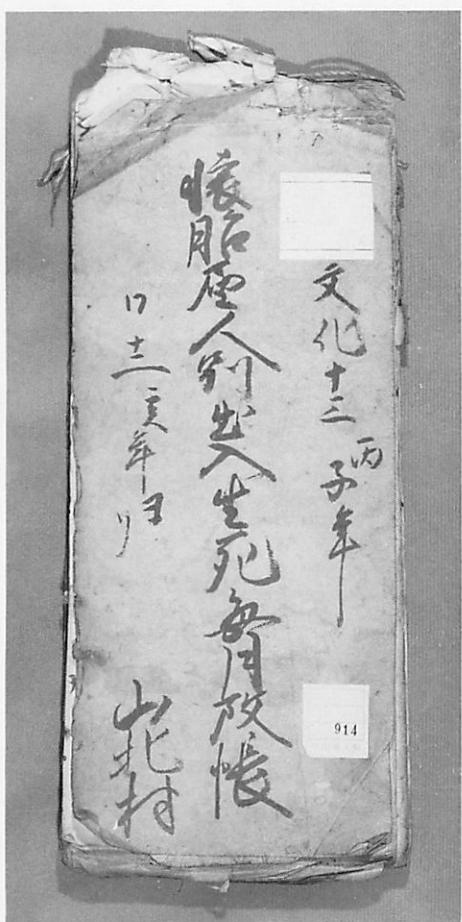
江戸時代中期以後の美作は、津山藩領以外に幕府領と多くの私領に分割されていたため、水利や草刈領界で他領との争いも多かった。



人別放手形 寛政 4年 (1792)



郷中御條目 安永 2年 (1773)



懷胎届人別出入生死改帳 文化13年 (1816)

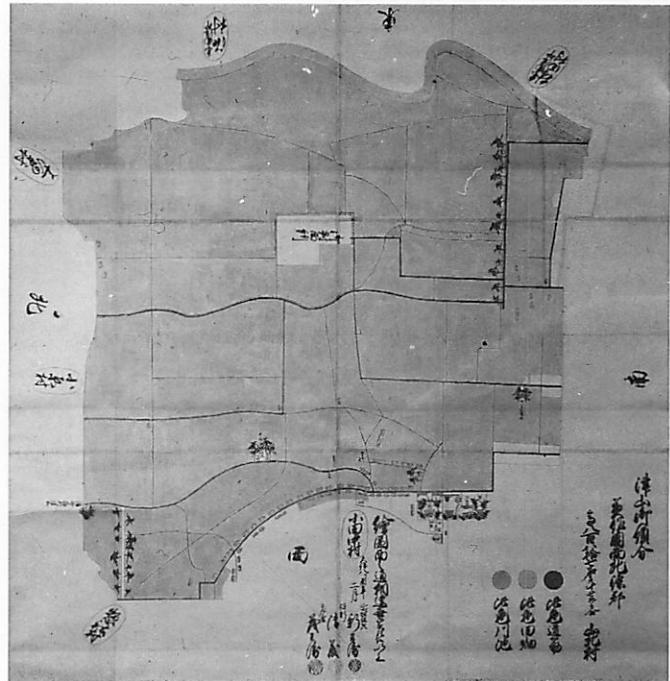


川辺村本新田畠畝名寄帳 享保 9年 (1724)



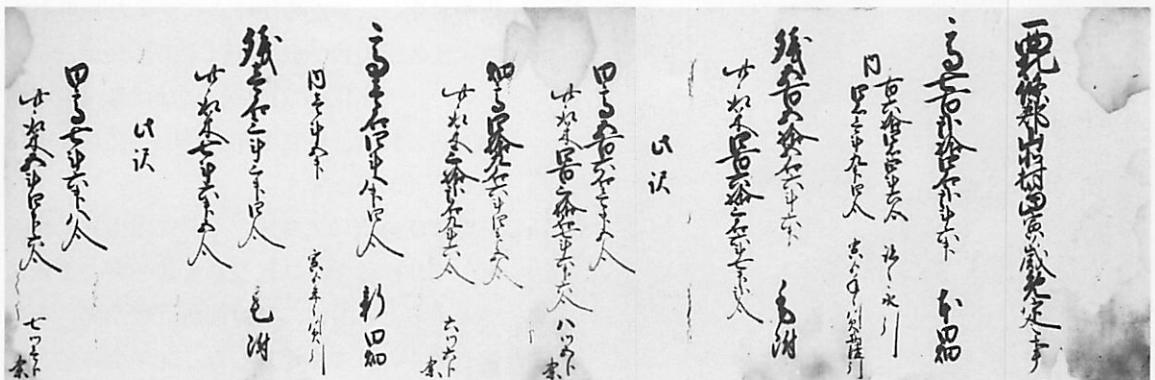
美作孝民記 文政3年(1820)

美作国内の孝子孝民を伝えたもので、江戸時代の農村の姿をよく表わしている。



山北村絵図 天保8年(1837)

山北村は、津山城下町の北に隣接する村で、中央には藩主の憩の場である御対面所（衆楽園）が築造されている。



山北村年貢免定(部分)

天明2年(1782)

此取米七斗六升八合
田高七斗六升六合

七ツ壱分余

此訛

高壠石四斗八升四合
内壠斗五升
残壠石三斗三升四合
此取米七斗六升五合
六ツ六分余
新田畑
毛附

田高五百六石壠升五合
此取米四百三拾石七斗六升六合
八ツ五分余
烟高四拾九石六斗四升五合

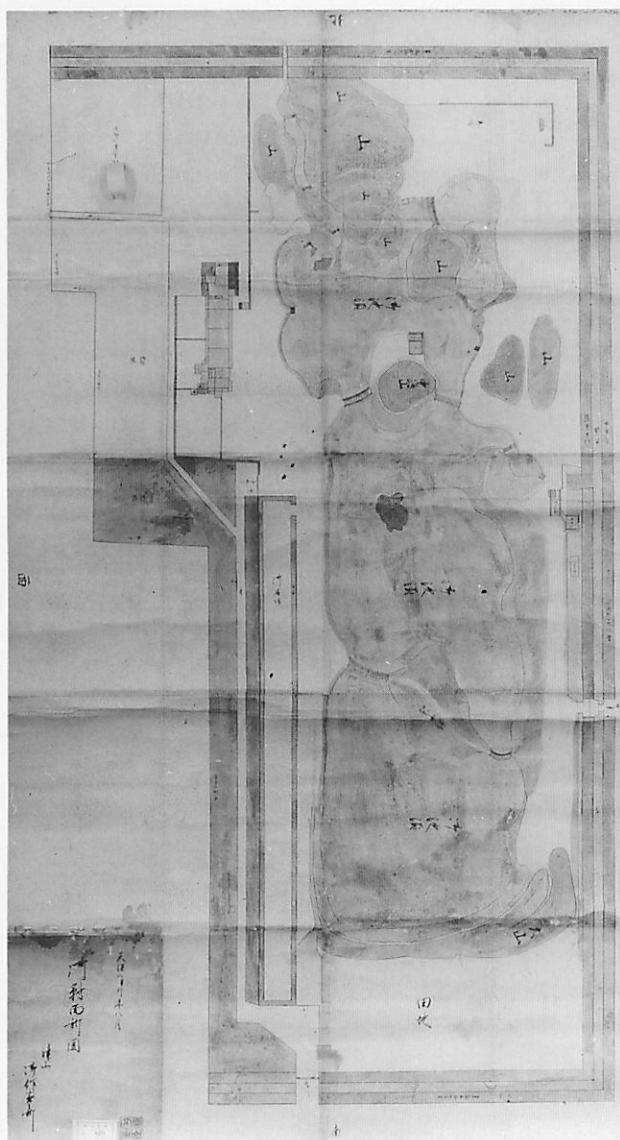
此訛
寅々年々川欠井溝引
内百石
四石老斗九升四合
寅々年々川欠井溝引
此取米五百五拾五石六斗六升毛附
高七百石拾四石武斗六升 本田畑

西北条郡山北村当寅ノ歳免定之事

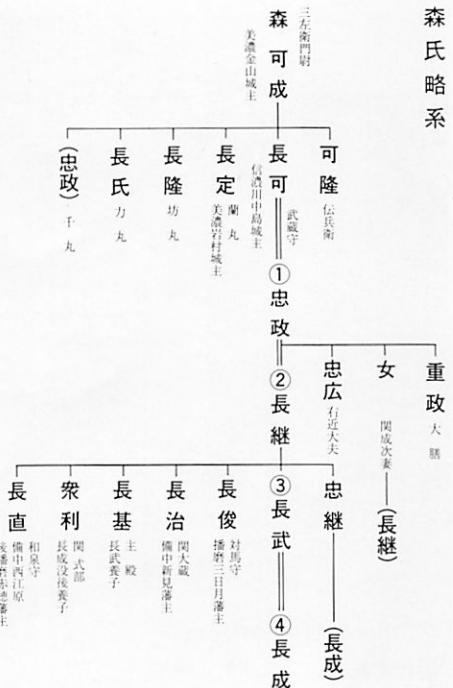
4. 森氏と松平氏

森氏は江戸幕府の外様大名で、美作一国を4代90年余にわたって治めた。初代忠政が美濃国金山から信濃国川中島をへて、関ヶ原の戦功により慶長8年(1603)に18万6,500石を領して津山に入封する。元禄10年(1697)，第4代長成の急死後除封となり，その後裔は赤穂や三日月に移った。

松平氏は徳川家の二男を祖とする親藩である。はじめ越前国70万石余を領したが、越後国高田に転封しその後改易となる。しかし元禄11年(1698)，美作国内10万石を領して津山に入封する。享保11年(1726)，5万石に減石されるが、文化14年(1817)，將軍家斉の子を養子に迎え10万石に復帰する。明治維新まで9代 170年余津山藩を治めた。



御対面所絵図 天保2年(1831)



森氏と津山藩

森氏は源義家の六男義隆を祖とする。後裔よしなり可成は織田信長に仕え、戦功を顯して美濃国金山城を給う。本能寺の変で長定・長隆・長氏が討死し、また豊臣秀吉に任えた長可が小牧・長久手の戦で戦死後は末弟忠政が森家を嗣いだ。天正18年(1590)には信濃国川中島12万石に封じ、慶長8年(1603)に美作国18万6千500石を領す。

忠政は津山に入封後ただちに津山城と城下町づくりに着手、二代長継も城下町の整備につとめるとともに、御対面所(衆楽園)を造営し多くの社寺を建立した。50年余の年月をかけて形成された津山城下町は、以後美作の中心地として栄える。元禄8年(1695)幕府は江戸郊外の中野村に犬小屋を新設した。4代長成が普請の手伝を命じられるが、津山藩にとつては容易ならぬ賦役であった。元禄10年長成が死去し、その後嗣衆利が家督相続のため江戸に赴く途中病気となり森氏は除封、その後裔は播磨国赤穂2万石、三日月1万500石を領すとともに、関長治(長継の9男)は備中国新見1万8千700石を領した。

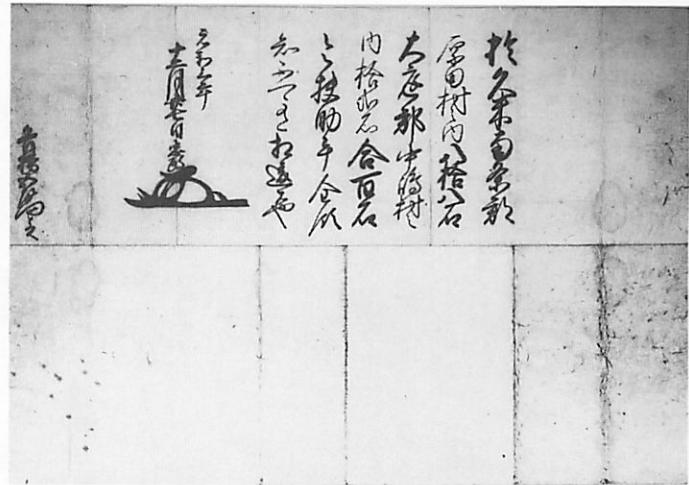
各務五左衛門とのへ

於久米南条郡
原田村之内八拾八石
大庭郡中嶋村之
内拾弐石合百石
令扶助暈全領
知不可有相違者也
元和三年
十二月廿七日 忠政(花押)

各務五左衛門とのへ

為加増於勝北
郡荒内村之内拾八石
大庭郡中嶋村之
内拾弐石合三拾石
令扶助暈全領知
不可有相違者也
元和八年
三月十六日 忠政(花押)

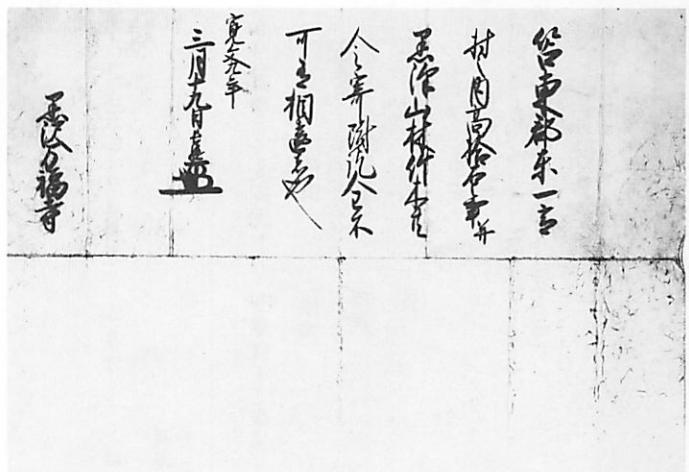
黒沢万福寺



森忠政知行狀 元和3年（1617）



森忠政知行狀 元和8年（1622）

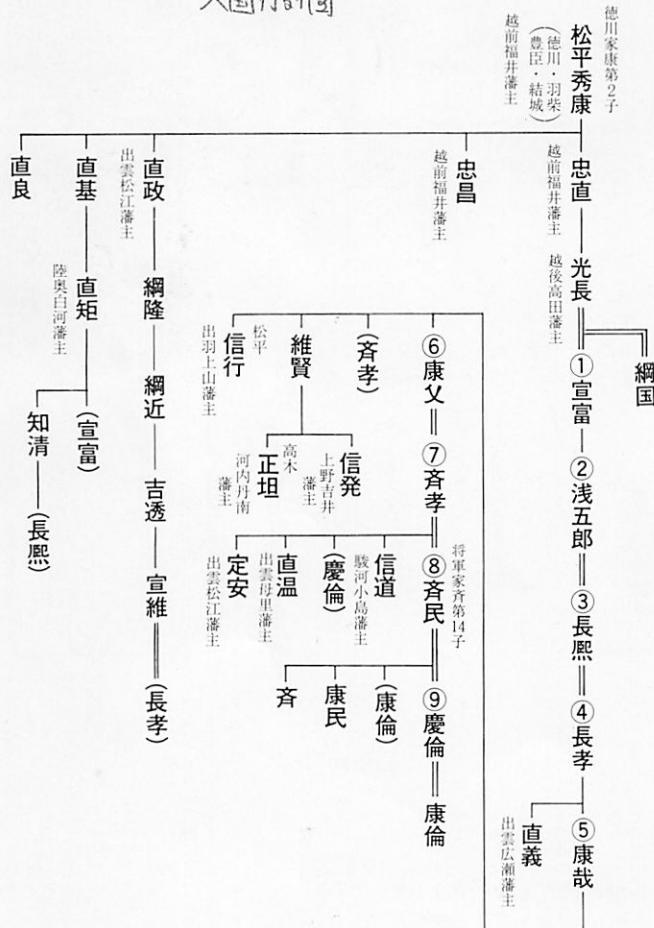


森長繼寺領寄進狀 寛文9年（1669）



津山藩主松平斉孝津山入国図 明治17年（1884）

入國行動圖



松平氏略系

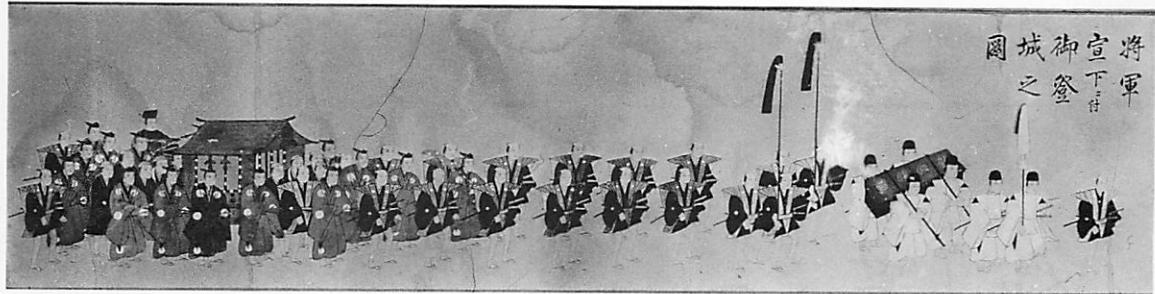
松平氏と津山藩

松平氏は、徳川家康の二男秀康を祖とする。越前国75万石を領したが、元和9年（1623）忠直が除封となり、嫡子光長は越後国高田26万石に移封される。天和元年（1681）越後騒動によって再び除封、光長は伊予国松山に配流となる。

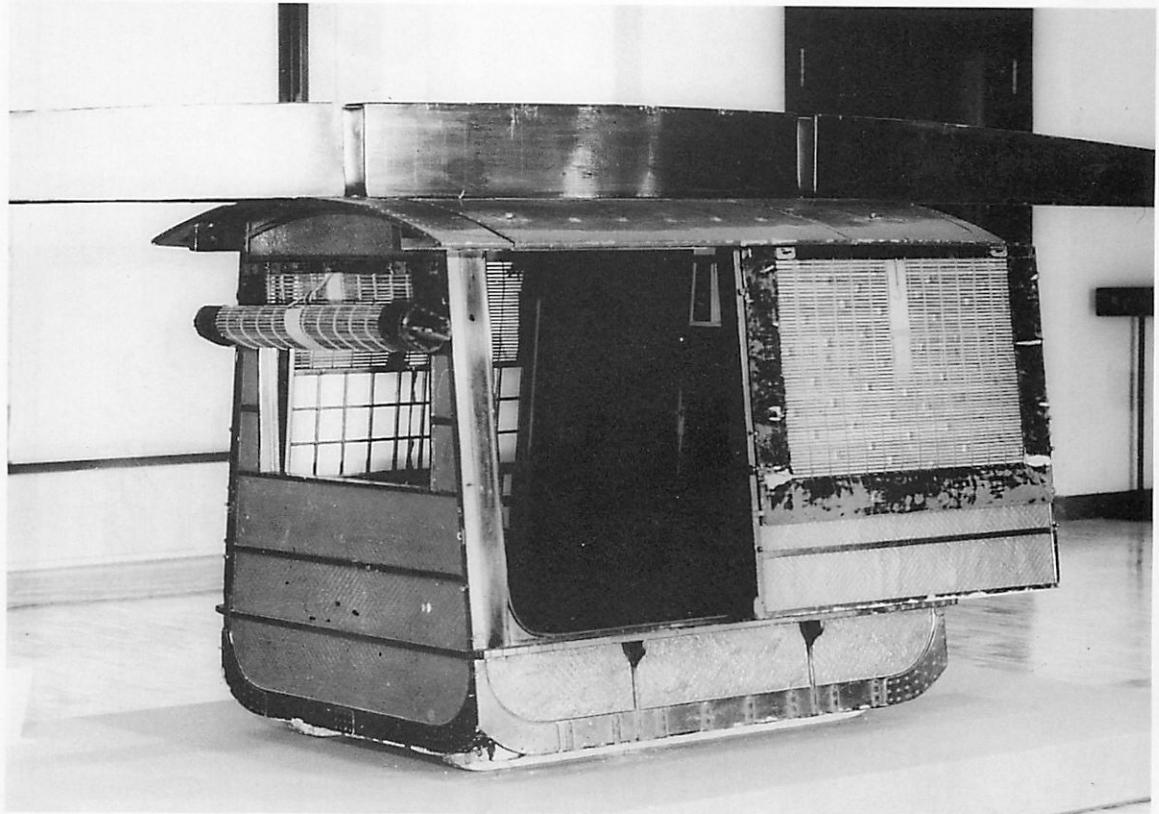
元禄11年（1698）養子宣富が美作国津山10万石を領して松平家が復興するが、享保11年（1726）浅五郎が死去、幼少で後嗣がなく5万石に減石される。この年の暮、美作北西地域でおこった一揆は山中一揆と呼ばれ、津山領最大の百姓一揆であった。

文化14年(1817)、津山藩は將軍家斉の第14子を養子とし10万石に復帰、天保7年(1836)同8年には領知の一部交替をおこなって小豆島等が津山領となる。慶^{よし}_{とも}倫の代には外国船来航に付海岸防備や長州征伐に出陣、また慶応2年(1866)には領内で百姓一揆(改政一揆)がおこる。

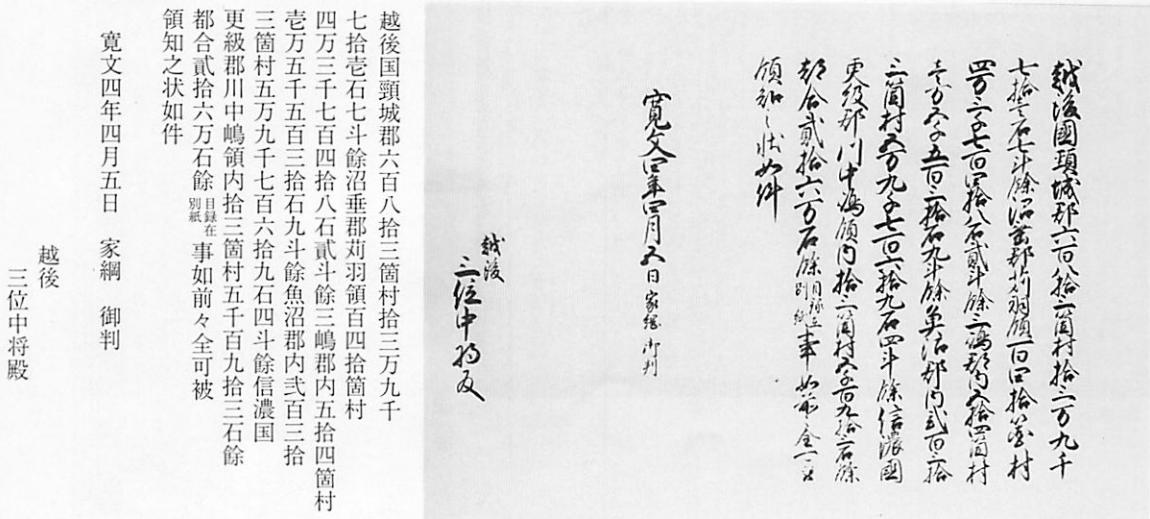
明治2年(1869)、版籍奉還により慶倫は知事に任命されるが、明治4年廢藩置県によって津山藩は津山県となる。

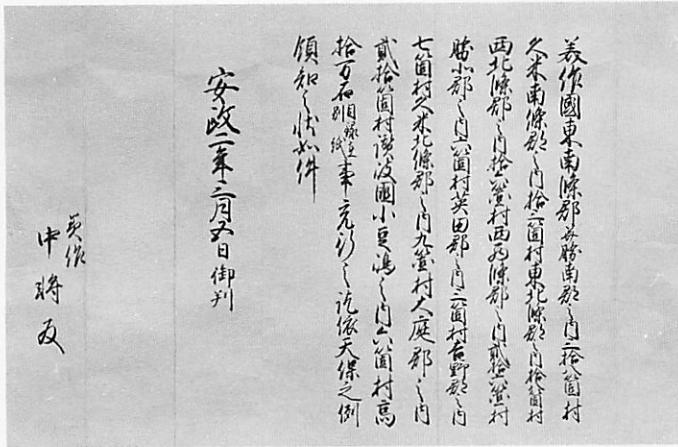


將軍宣下に付津山藩主登城の図 嘉永6年(1853)



御駕籠 津山藩主松平家が参勤交代の際使用したもの

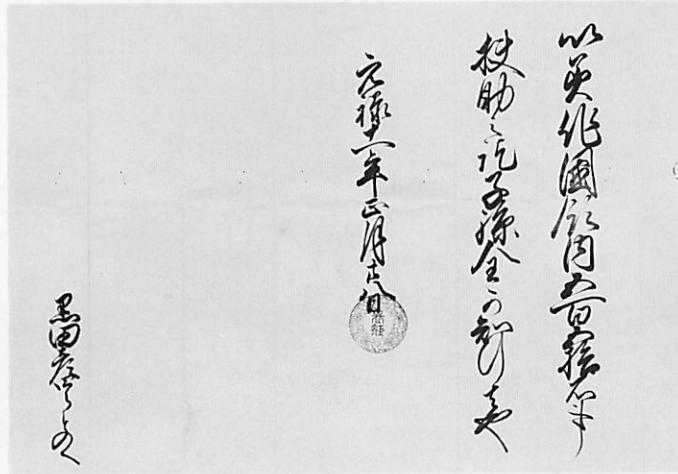




徳川家定領知判物 安政2年(1855)



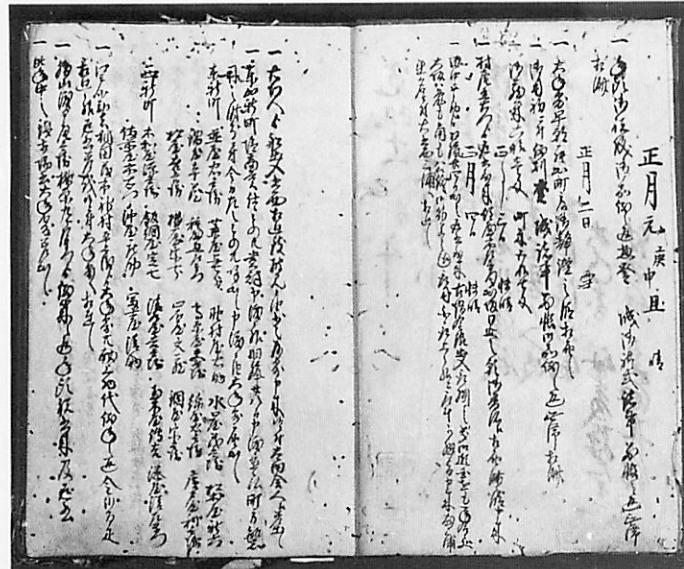
国元日記 寛政6年(1794)



松平宣富知行状 元禄11年（1698）



江戸日記 寛政12年 (1800)

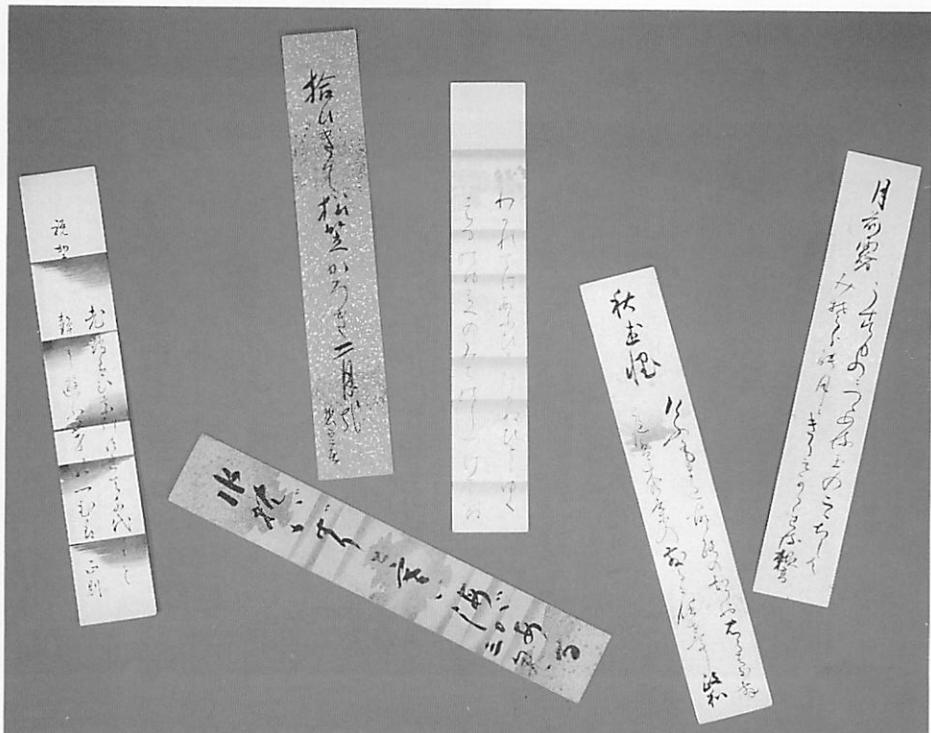


町奉行日記 寛政11年(1799)



町奉行日記 寛政11年(1799)

郷土の百年

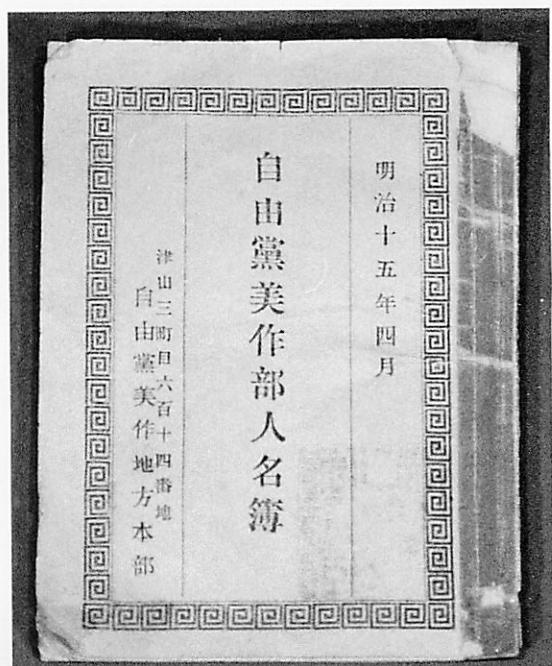


文学者の短冊

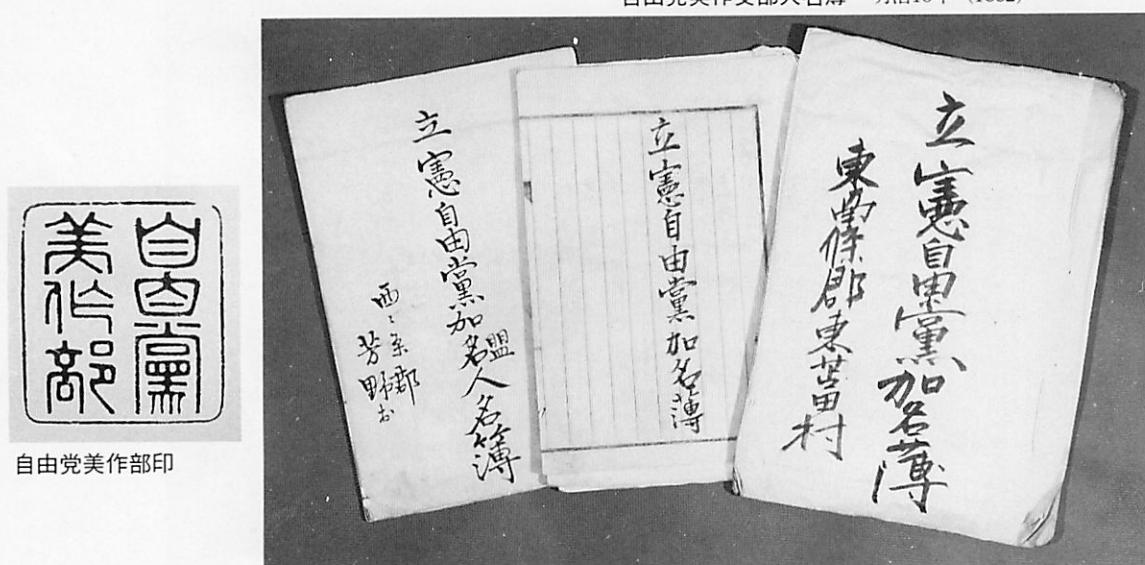
1. 民衆運動

明治初年、国会開設・憲法制定など民主主義政策を要求した自由民権運動が全国的に高揚した。美作では、中島衛・立石岐・安黒基らが中心となり、明治11年（1878）に共之社、同13年（1880）に郷党親睦会、翌14年（1881）に美作親睦会が相次いで設立されたが、これらは会員の親睦などを目的とした。

美作における本格的な自由民権運動は、明治14年の美作同盟会の設立によって始まった。同会では『美作雑誌』を刊行し、憲法発布を要求するなど政治的思想を発展させた。これをもとに翌15年（1882）に発足したのが自由党美作地方本部である。皇室と国権、自由と幸福、立憲政体の確立などを掲げ、自由党という全国組織と目的を同じくしていた。しかし会員は大農出身者が多く、豪農民権といわれた。

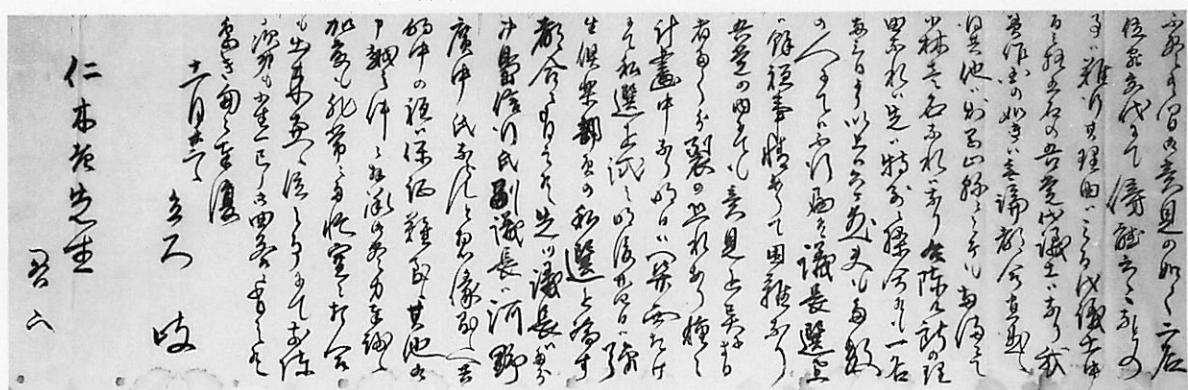


自由党美作支部人名簿 明治15年（1882）



自由党美作部印

立憲自由党加名簿



立石岐書簡 (仁木永祐宛) 明治24年（1891）

2. 学校の歩み

津山市内に学校が出来るのは明治5年（1872）で、旧藩校（修道館）を利用して8歳以上の男子を入学させた。市内外に広く小学校が設立されるのは明治7～11年の間であるが、入学者は極めて少なかった。校名には高野・田邑・玉琳などの地名に由来するものと、論語・礼記などの書物から用語を使用した成器・知新といった名を付けた。当時使用した教科書は、算術・習字のほかに西洋の地理・歴史書の翻訳本が多く、地学初步和解（字

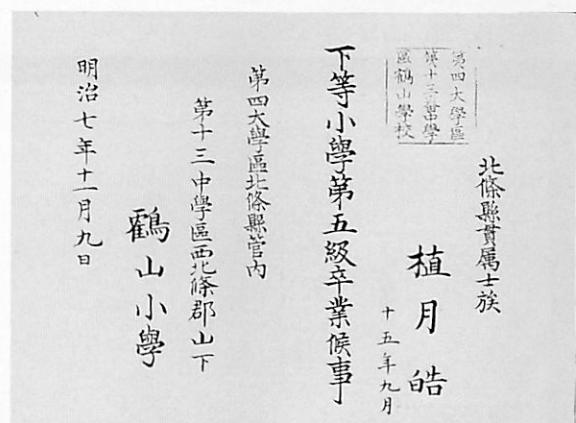
だがわようあん
田川裕菴）・泰西勸善訓蒙（箕作麟祥）が広く使用されたが、しだいに修身や郷土の歴史を重視するようになる。

明治19年（1886）からは小学校は義務教育となり、就学年数・学級人数等も教育に関する法令が出される度に変更され、また町村制施行を機として統廃合もおこなわれる。

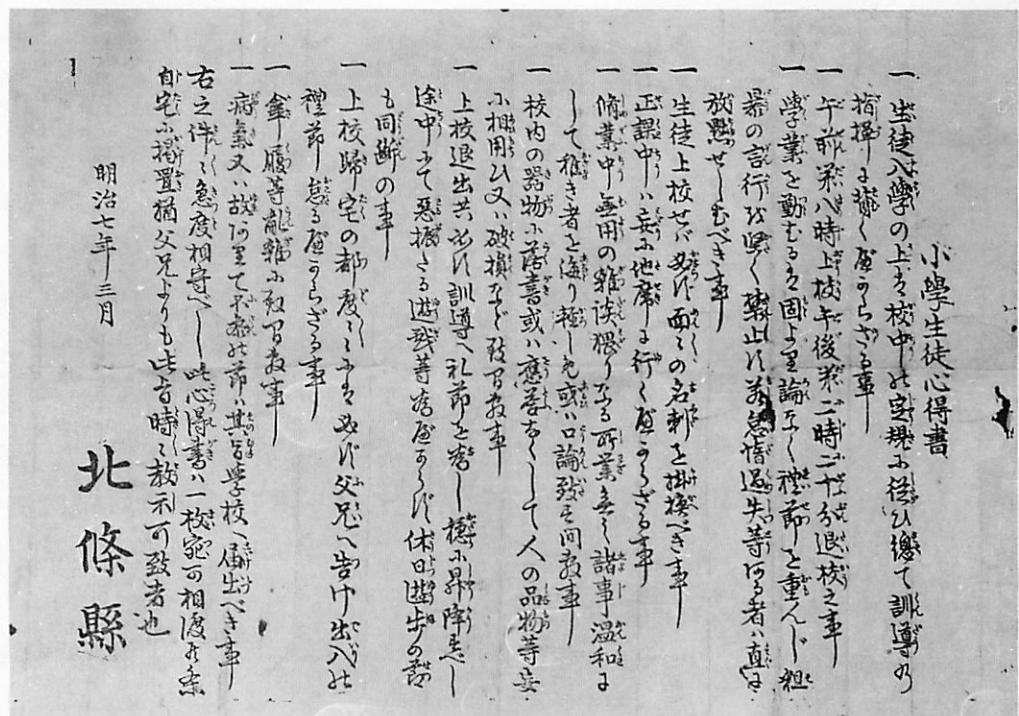
戦前の教育は、教育勅語の影響をうけて国家主義的色彩の濃いものであったが、終戦後の昭和22年（1947）出された教育基本法や他の新しい法令が今日の教育の基となる。



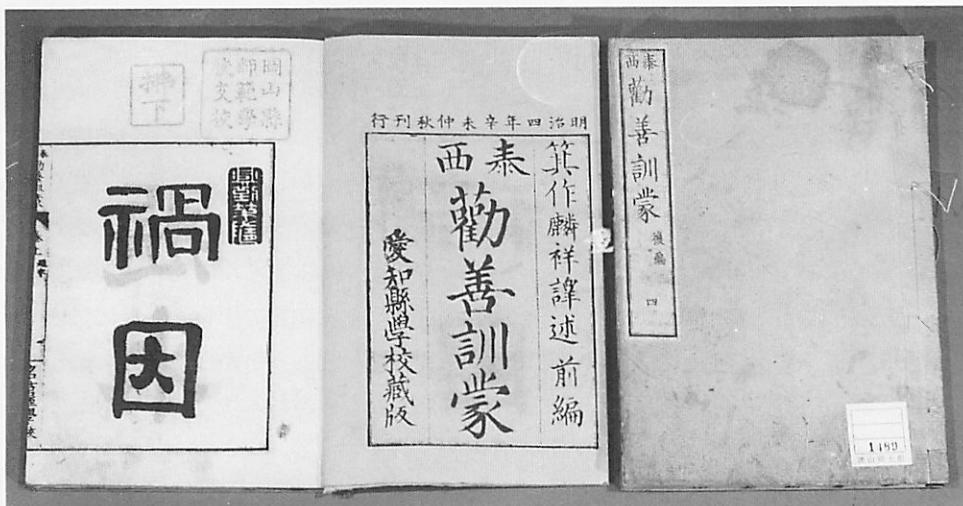
教員辞令 明治15年（1882）



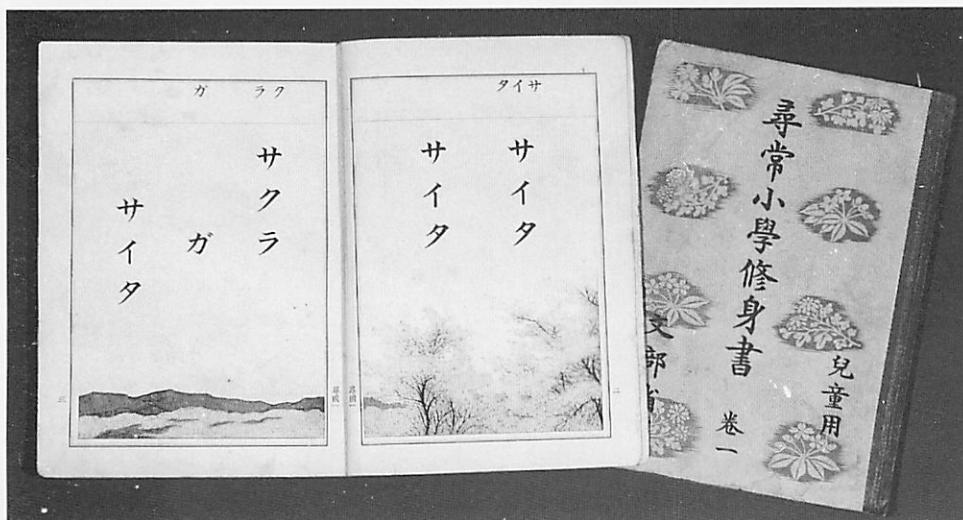
卒業証書 明治7年（1874）



小学生徒心得書 明治7年（1874）



泰西勸善訓蒙 明治4年（1871）



明治時代の小学校教科書 中村勝男氏蔵



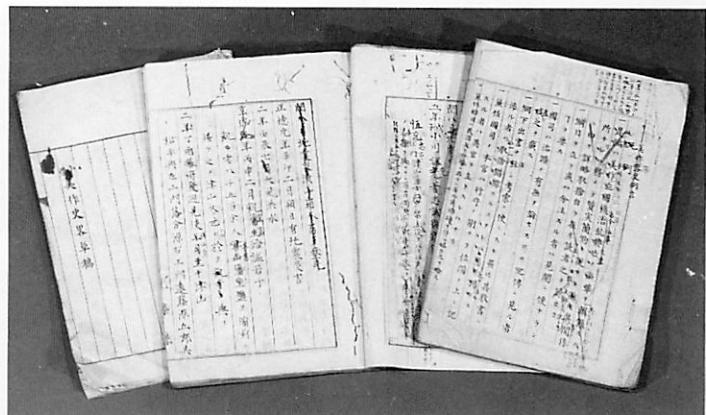
小学美作史略 明治13年（1880）

教科書の変遷

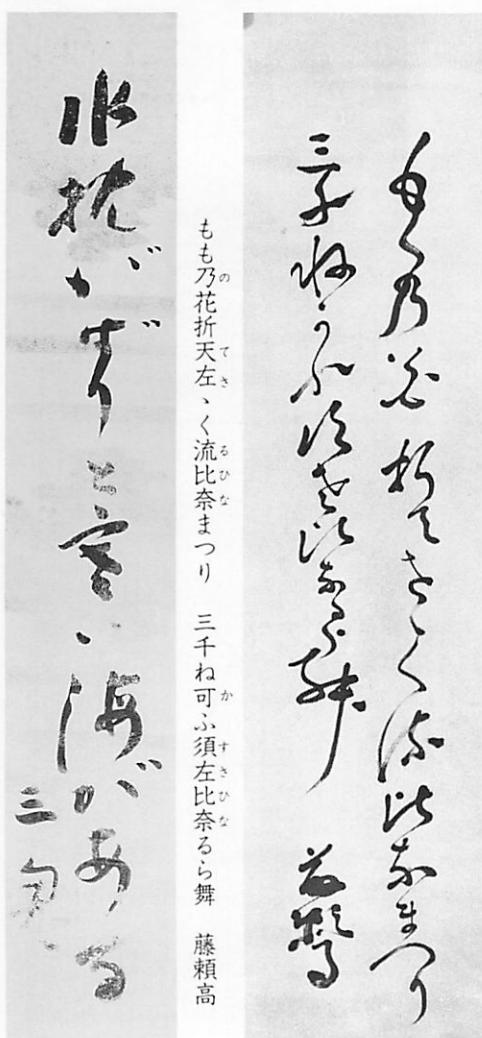
明治10年代から地方別に地誌や地方史の教科書が出版される。『小学美作史略』は矢吹金一郎が発行したもので、美作地方史を主体とした小学校用歴史教科書である。明治19年（1886）に文部省の教科書検定制度が定められ、文部省が『尋常小学読本』を発行する。大正期になると第一次大戦後の思想を反映した教科書が刊行され、『小学国語読本』も満州事変後の思想を反映したものである。

3. 近代の文化と人物

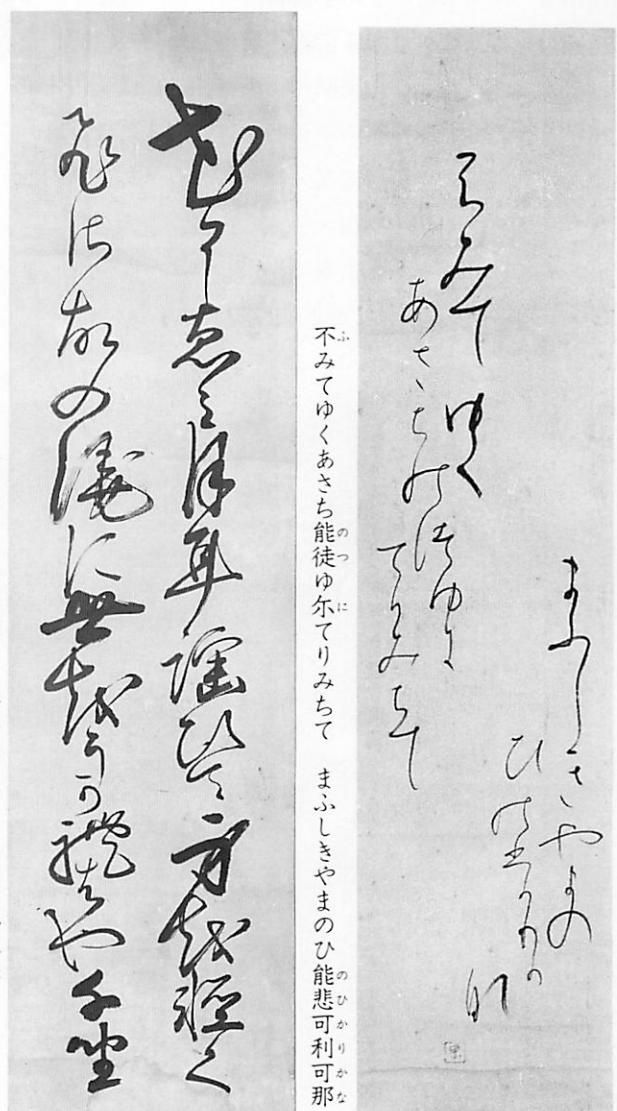
明治以降、津山からは近代日本の興隆に貢献した多彩な文化人を輩出した。まず矢吹正則・金一郎父子は『美作略史』・『津山誌』などを著し、今日の郷土史研究の基礎を築いた。歌人としては美甘政和や直頼高が活躍するが、「水甕」を主催した尾上柴舟は歌集『銀鈴』・『静夜』などを刊行するとともに古典研究も行った。俳人には大谷是空、その甥碧雲居がいる。西東三鬼は『天狼』・『断崖』など俳句雑誌を刊行し、戦後の俳壇に大きな影響を与えた。



美作略史草稿 矢吹正則著 矢吹芳郎氏蔵



西東三鬼俳句
田中耕作氏蔵



小原千座短歌

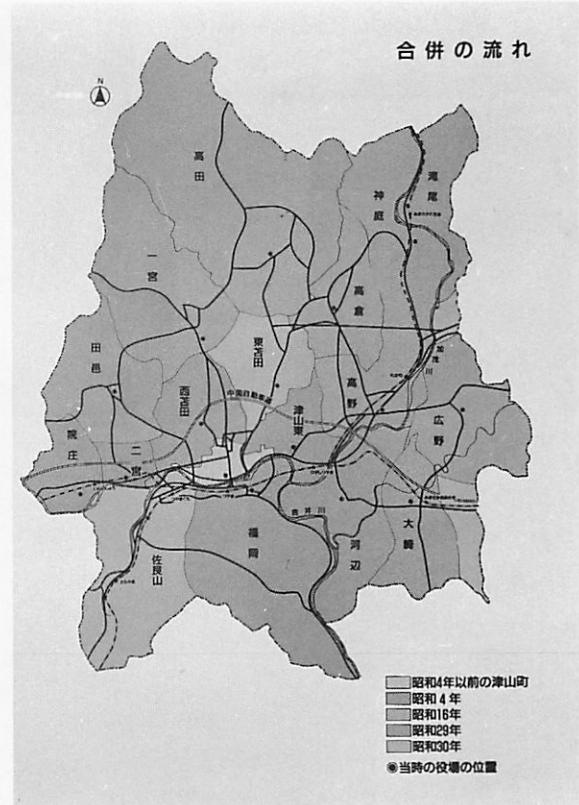
尾上柴舟短歌

直頼高短歌

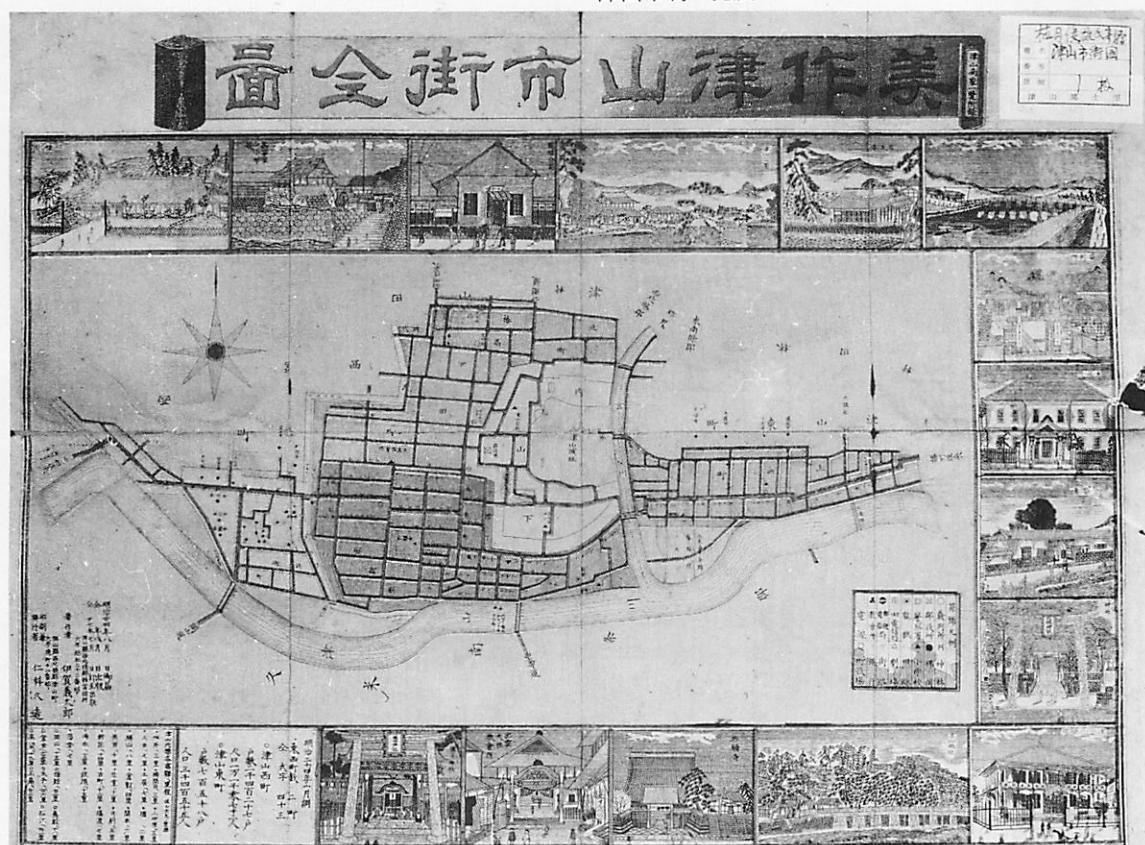
4. 津山市の移りかわり

今日の津山市は、江戸初期に作られた津山城下町をもととしている。明治4年（1871），美作一円が北条県となると、津山城下とその周辺は12の区域に細分された。その後明治22年（1889）には、町村制施行により2町（津山町・津山東町）と19村（林田・高野・東一宮など）に統合された。

市制施行の運動は大正期から起こるが、実現するのは昭和に入ってからである。昭和4年（1929），津山町・津山東町の2町と西苦田・二宮・院庄・福岡の4村が合併し、津山市が誕生した。人口33,361人であった。その後昭和16年（1941）に東苦田村を合わせた。戦後の昭和29年（1954）には、津山市と隣接10か村（滝尾・神庭・高倉・高野・広野・大崎・河辺・高田・一宮・田邑）が大合併し、人口80,618人へと大きく膨張した。そして翌30年（1955）に高取村・勝加茂村の一部を合わせ、今日の津山市が成立した。



津山市制の発展



美作津山市街図 明治27年（1894）

美作の美術・工芸



銀杏穂造大身槍 細川正義作



江戸一目図屏風 鍬形恵斎筆 文化6年（1809）



菊花図 鍬形恵斎筆 池上正氏蔵

江戸一目図屏風と鍬形恵斎

江戸一目図屏風は津山松平藩御用
絵師鍬形恵斎が文化6年（1809）に
大都市江戸の全貌を詳細に描いた鳥
瞰図である。江戸城、諸大名の屋敷、
社寺仏閣などの建造物は正確で、遙
かに富士山を仰ぎ、手前の隅田川が
江戸湾に注ぐ。また武士・町人などさ
まざまな人物が軽妙に描かれている。

鍬形恵斎は江戸時代後期の浮世絵
師。宝暦11年（1761）に生まれる。
通称を三次郎という。はじめ浮世絵
師の北尾重政に師事し、北尾政美と
名のったが、寛政6年（1794）に津
山藩に召しかかえられ、鍬形恵斎と
改名、のちさらに紹真と改めた。江
戸各地の名所風景や、日常生活にお
ける人物の多様な形態描写を得意と
した。代表作に「近世職人尽絵詞」
がある。文政7年（1824）没。



竹林清流図（部分） 広瀬台山筆 末安祥二氏提供

広瀬台山 (1751~1813)

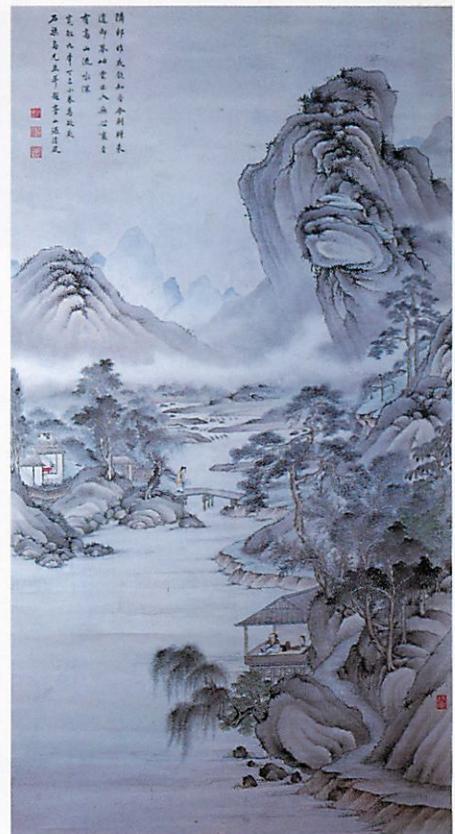
江戸時代後期の南画家。

通称は周蔵のち雲太夫、台山は号。宝暦元年（1751）津山藩士の家に生まれる。青年期に福原五岳に師事し南画を学ぶ。家督相続の後江戸に出府し、藩の重臣として出仕するかたわら、谷文晁ら著名な文人たちと交流を深める。晩年は帰郷して書画に親しんだ。

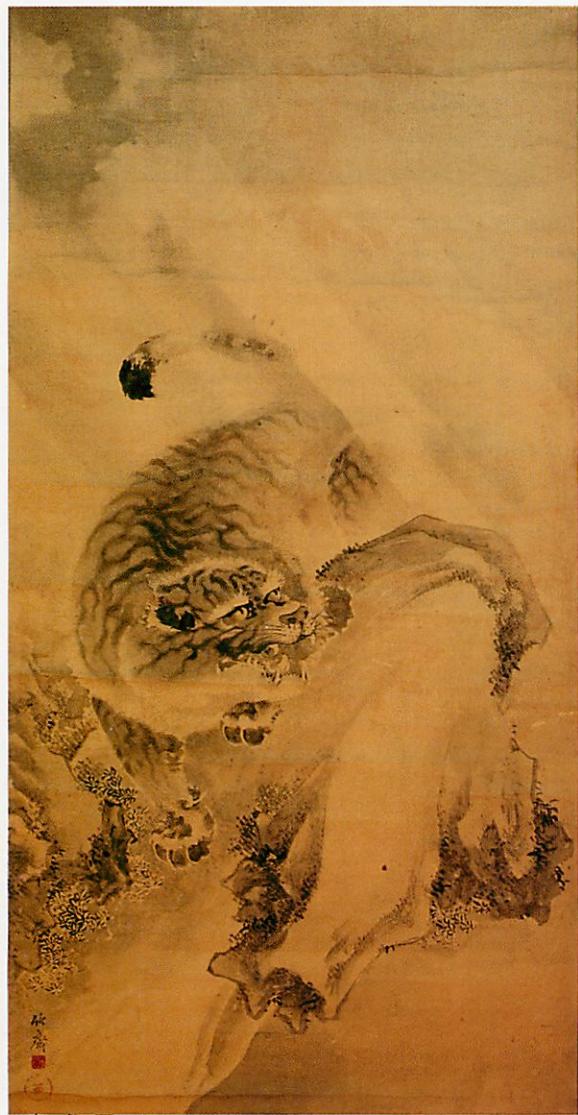
画譜類の方法論を忠実に受け継いだ山水図をよくし、作品は緻密で格調が高い。文化10年（1813）没。



花鳥図 広瀬台山筆 莉田善政氏蔵



秋水釣遊図 広瀬台山筆 莉田善政氏蔵



竜虎図 飯塚竹斎筆 2幅



飯塚竹斎 (1796~1861)

通称は与作。津山藩士。同藩の広瀬台山に師事し、さらに明画の手法を学ぶ。現在遺る作品は山水がほとんどで花鳥・人物は少ない。用筆はきわめて巧緻である。数少ない花鳥画のうちには西洋画の影響をうかがわせるものがある。師の台山が谷文晁らとの交際を通じて洋画法を学んだと推定されるのとは異なり、竹斎の場合、津山洋学との関わりの中で洋画法を摂取した可能性があり注目される。弘化年中、病のため歩行不能となつたが、なおも画業に励んだといわれる。文久元年(1861)没。

たなだぎょうざん
棚田暁山 (1878~?)

現代の日本画家。明治11年(1878)津山に生まれる、本名梅吉。壯じて東京に出て小堀鞆音に師事して土佐派を中心とする大和絵と有職故実を学ぶ。歴史人物画を得意とした。

第2次大戦中は津山に疎開する。戦後東京に戻り画業にたずさわったらしいが、昭和26年(72歳)以後の消息は不明である。大和絵の伝統をふまえた精緻で迫力に富む作品を描いた。代表作に「写経の図」などがある。



武将出陣図 棚田暁山筆



黒田家伝来甲冑

利用案内

- 開館時間 午前9:00～午後5:00
(入館は午後4:30まで)
- 休館日 月曜日・祝日の翌日
12月27日～1月4日
その他津山市教育委員会の特に定める日

●入館料

区分	個人	団体
一般	200円	160円
高校生・大学生	150円	120円
小学生・中学生	100円	80円

※団体は30人以上。

※特別展の入館料はそのつど定めます。

●入館料の減免

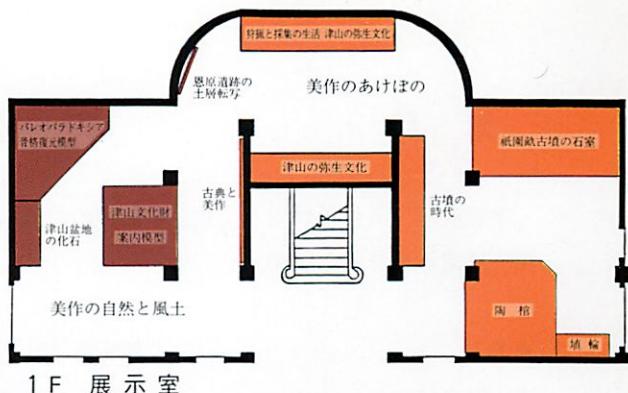
- 津山市内の小・中学校の児童・生徒が教職員に引率されて入館するとき（免除）
- 小・中学校の教職員が児童・生徒の引率者として入館するとき（免除）
- 身体障害者手帳の交付を受けている者が入館するとき（免除）
- 津山市内に居住する65歳以上の者が入館するとき（50%減額）

●交 通

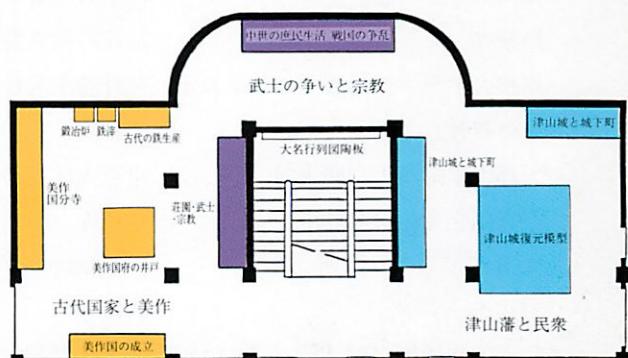
- J R 津山駅から北へ徒歩15分
- 中国自動車道津山・院庄各インターから車で15分

津山郷土博物館

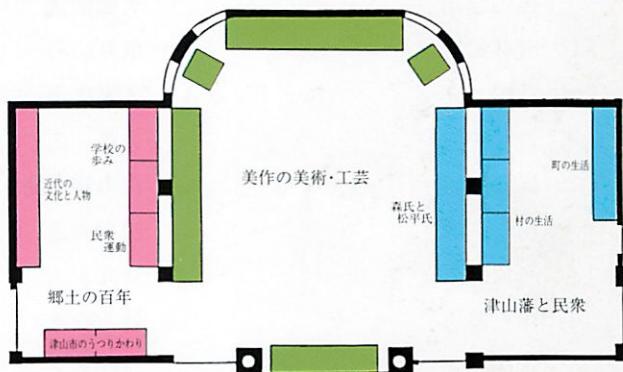
〒708 岡山県津山市山下92
TEL (0868) 22-4567



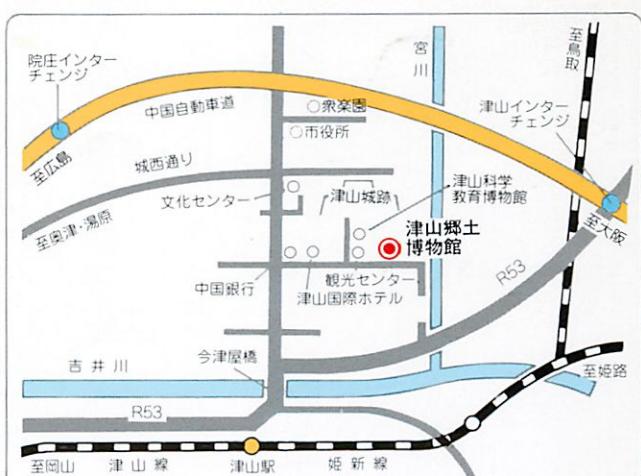
1F 展示室



2F 展示室



3F 展示室



交通案内図

謝 辞

常設展示「美作の歴史と文化」の開催のために御協力いただいた下記の機関・個人の方々に深く感謝の意を表します。

永源寺	岡山県古代吉備文化財センター	岡山県総務部県史編纂室
岡山県立博物館	岡山大学文学部考古学研究室	岡山理科大学理学部
勸修寺	加茂町教育委員会	京都国立博物館
京都大学理学部地質学鉱物学教室	熊野速玉大社	国分寺
高野神社	知恩院	長法寺
天理大学附属天理図書館	東京大学史料編纂所	徳守神社
奈良国立文化財研究所	仁和寺	広島大学工学部
米山寺	法金剛院	防府毛利報公会
万福寺	妙法寺	向日市教育委員会
向日市文化資料館	池上 正	伊藤 晃
稻田孝司	犬塚則久	植月壮介
大林篤禧	龟井節夫	苅田善政
苅田 立	久家直之	肥塚長男
近藤義郎	志茂 篤	鈴木 充
高谷宗勝	田中猪之助	田中耕作
田中 琢	田辺満雄	玉置明正
玉置芳久	坪井正道	中西秀夫
中村勝男	牧山政雄	美甘隆夫
水杉和弥	三好基之	矢吹芳郎
		(敬称略)

常設展示解説
美作の歴史と文化

平成元年3月31日発行

編集・発行 津山郷土博物館
岡山県津山市山下92

印 刷 株式会社 広陽本社
岡山県津山市田町22
